ひととけもの

亀山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひととけもの

【Ｎコード】
Ｎ３５８４Ｏ

【作者名】
亀山

【あらすじ】
昔々それはそれは美しい獣がいました・・・　そんなおとぎ話が伝わる世界。そこそこ大きな街で暮らす本好きなひきこもりとそのお隣さんの女の子のお話。亀更新注意！

はじまりのしょ

昔々のその昔。それはそれは美しい獣がいました。
獣はとても美しかったので人間に狙われるようになりました。
獣は人間を恨みました。それ以上に悲しくなりました。
なぜわたしがこんなめにあわなくてはならないのか。
そう人間に問うても答える人はいませんでした。

ある日、獣はひらめきました。
わたしがけものだからねらわれるのだから、わたしはけものをやめればいいのだ。

獣は高い高い山に住んでいるという神様に会いにいきました。長い長い旅路の果て、人間に追われながらも獣は山を登り、神様に会うことができました。

かみさまかみさま。わたしをにんげんにしてください。
獣の願いを聞いた神様は驚きました。
お前はいつも人間に追われ、傷ついているではないか。なぜそんな人間になりたいと願う？
獣はしっぽをひと振りして答えました。

そうです、わたしはにんげんにおわれ、きずつきました。にんげんをうらみました。そしてにんげんをかなしみました。

　でもそんなにんげんにわたしのいのちをやるのがいやなのです。とじこめられ、おりのそとからにんげんにみられ、やがてころされるうんめいがいやなのです。

神様はうーんと唸ってそれからわかったと頷きました。

獣よ、お前を人間にしてやろう。だが一つそのために無くしてほしいものがある。

なんですか。そう獣は神様に問いました。

わたしのこのみみですか。めですか。はなですか。それともこえをなくしましょうか。おをかみちぎりましょうか。

いやいや、そうではない。神様はいいました。

無くしてほしいのはお前の感情だ。その心だ。それを無くさない限り、お前を人間にしてやることはできん。

獣は言いました。

よろこんで、よろこんでわたしのかんじょうをささげます。このこころをささげます。そんなことなど、このいのちとくらべればなんてたやすいことでしょうか。

そうか、捧げてくれるか。神様は少し悲しそうにいいました。

哀れな美しい獣よ、お前を人間にしてやろう。そしてその命も延ばしてやろう。どの生きものよりもずっと長生きにしてやろう。姿を変えてまで守りたかったその命、死がお前を迎えに行くまで大事にするがいい。

そうして美しい獣は美しい人間になったのです。

はじまりのしょ（後書き）

はじめまして、亀です。感想などあれば亀に向かって発信してくれればうれしいです。
割と見切り発車ですが、生温かく見てもらえれば幸いです。

はっけんしたもの

「さーて・・・今日はどうやって外に引きずり出してやろうかしら」

そう物騒な独り言を呟く少女の名はユノ＝メリクリス。

なんとも大層な名字を持っているが、彼女はいたって普通の一般庶民だ。

メリクリスという名はかつて獣に人間の姿を与えた神様の名であり、その恩恵を願う人々が名字にすることが多い。よって『メリクリス』は王族から一般庶民まで幅広く名乗られているのである。

さて彼女の目の前に立ちはだかるのは良く言って古風な、悪く言っていかにも出そうな幽霊屋敷だ。

長年の雨や埃によってついた汚れはなかなか取れるものではなく、もともと白かったであろう館の壁は灰色へと変色している。さらに外壁と壁にはびっしりと蔓がはびこり、館の全体の雰囲気をより暗く表現している。シックでエレガントな装飾はその蔓にうずもれ、どこの誰がみても恥ずかしくない幽霊屋敷の完成というわけだ。

そんな幽霊屋敷にすんでいる変人がいることに気がついたのはもう6年ほど前になる。

当時8歳だったユノがこの館にボールを取りに行ったところその変人にばったりと出くわしたのだ。

忘れもしないそのファーストコンタクト。

「気の毒なほどにおびえてる幼い少女に向かってボールを探すこともせずに睨みつけて消えろってあんたは本当に人でなしよね！！！」

「うるさい黙れ消えろ。そこにミルクの空の瓶があるから持って帰ってまたミルクつめて持ってこい」
「消えろっていったり持ってこいっていったりどっちなのよ！　つーか私はミルク宅配便じゃない！！」

ユノがばーんと扉をあけるなり文句をつけたその変人はこちらをちらりとも見ることもせずに言い放った。
こちらからは背中しか見えないが、その目は手の中にある本から離していないに違いない。部屋の中に光源は変人の手元にしかなく、オレンジ色に照らされたその部屋はどこを見ても本、本、本。どうやってここまでの本を手に入れたのか。いっそ図書館でも開けばいいとユノは思う。

いつまでたっても出て行こうとしないユノに変人はしびれを切らしたのか、のそりとこちらに向き直った。逆光となった彼の姿はとても見えにくい。しかしこちらを睨みつけていることは何となくわかった。

しかし彼の鋭すぎる眼光など6年も通い続ければ慣れてくる。ユノはさっさと彼の横を通り過ぎて一つしかない窓をカーテンもろとも開け放った。とたんに入ってくる明るい光から逃げるように彼は焦って窓から逃げる。あまりに焦りすぎて本の山に躓いて勢いよく床に転がったほどだ。床に転がった彼はゴン、と本棚にぶつかって上からざざぁと本が雪崩れてきた。本と埃に埋もれた彼はその鋭い目つきを半眼にしてユノをじとっとねめつける。

「・・・なにすんだよ」
「何って窓を開けただけよ。こんないいお天気に窓閉め切ってるなんてもったいない。おまけにカーテンまで・・・」
「俺は夜行性だからいいの」

「夜行性でも日には当たらないと病気になるわよ。おひさまは神様の化身。あらゆる魔を払ってくれるんだから！」

きっぱりと言い放ったユノに彼はくわぁと大きなあくびをお見舞いした。埃をかぶった白っぽい髪をがしがしと掻いてもさりと立ち上がる。滅多に立つことがない彼が立ったことに畏怖を感じたユノは両こぶしを体の前に持ってきておそるおそる声をかける。

「なによ。どこいくのよ」

「寝る」

「・・・・・・はぁ？」

「夜までには帰ってろ。今日一日お前にかまう暇はない。・・・眠すぎて」

「え、ちょ、ちょっとまってよ！軽く何か食べないと体もたないわよ！？」

「食うより寝る」

「ねえ、このサンドイッチ頑張って作ったのに！」

必死に声を掛けるユノを気にもかけずに彼は奥の寝室へと至る扉を閉めた。

自作のサンドイッチの入ったバスケットを振っていたユノはガクリ、と肩を落とした。

「また今日も惨敗、か・・・」

のそりと奥の部屋へと消えた彼の名前はディアンという。
幽霊屋敷に住み、本に囲まれて暮らしている・・・これはまさしく変人としか言いようがない。
外見年齢は２０代後半、日に浴びないからか体全体が白っぽく、しかしもやしというほど軟弱な体躯ではない。強いて言うなら肉食動物のような美しさを持っているのだ。
無駄に鋭い目といい、本能に任せて生きる姿といいまさに肉食動物。まあ肉食動物が本を好むというのはいたって奇妙ではあるが。

そんな肉食動物の美しさにあてられ、さらに目を離せば栄養もとらず日にも当たらないダメ人間のギャップにあてられ、こうしてユノは６年間毎日ディアンの元へと通っている。
せめて外に出したい。その願いは今まで一度も果たせたことはなかった。

帰り道、ユノははぁとため息をついて幽霊屋敷の隣にある自分の家へと向かっていった。
そう、ユノの家はこの幽霊屋敷のすぐ隣だ。
安くて広い家を購入できたんだと両親に連れられた家をみて子ども心になぜ安いのか察した。同時にこの家を買った両親に若干の不信感も刺したものだ。

そのことをまた思いだし、ユノは頭を抱えたくなって目線を下げた。がその時視界の端に奇妙なものを見かけてふとソレを目で追いかけた。

追いかけたといっても相手は動いていたわけではない。そもそもこのあたりは幽霊屋敷を怖がっている人が多く、必然的に人通りは少ない。だからこそソレはよく目に付いた。

「・・・なによこれ・・・」

ユノは道のド真ん中、幽霊屋敷とユノの家のちょうど間に倒れているぼろぼろの人影を見て頭を抱えた。

であうもの（前書き）

ちなみにひととけものはお届けもののようなアクセントで読んでもらえたら嬉しいです

であうもの

道端に倒れていた人は本当にボロボロだった。

伸び放題の髪はあちこちに泥がこびりつき、草木の枝を引っ掛けていた。体は泥水を頭からかぶって砂漠にでも飛び込んできたのかと思うほど汚れていて、衣服はもはやただの使い古した雑巾当然。荷物は誰かに取られたのか、見当たらなかった。正直ぜーぜーと彼が荒い息をしていなかったら死体と間違えていた。それほどひどい有様だったのだ。

ユノが慌てて家族へ知らせなかったら彼の命はそこでつき果てただろう。

彼は三日間生死の境を彷徨い、意識が戻るまでさらに三日かかった。意識が戻った時点で彼は家から出ようとしたのだが、メリクリス家のにこやかな鬼メアリ＝メリクリス・・・つまりユノの母によって押し戻されたのだ。

いつもゆるゆるとしている母が、あれほどの殺気を放ったのはかつて父の浮気疑惑が出たとき以来だと後にメリクリス家の子どもたちは話し合った。彼女は怪我人と病人と父には容赦しないのだ。

それはともかくまた一週間ほど体力が回復するまでメリクリス家にとどまることになった彼は苦笑してよろしくお願いします、とベットの上から頭を下げた。

「あ」

彼のベットの隣でミレの実（※消化しやすく栄養のある果物　病人食として定番）を剥いていたユノはここ最近のことを思いついて思わず声をあげた。どうしたんデスカ、とベットの上から彼が怪訝に尋ねる。

他の国からきたのだという彼は言葉が若干不自由だ。さらにこの国での名前がまだないらしく、じゃあ私が考えてあげるとユノが安請け合いをしたのがついさっきのことだった。

いまだ心配そうにユノをみる彼に何でもないと頭を振ってユノは心の中で呟いた。

私最近ディアンにあってない。

そう考えるとディアンが一人でいることに不安を感じた。だが彼なら何もしなくても生きているという確信があるので大丈夫のはずだ。たぶん。きっと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっと・・・本当に大丈夫デスカ？気分が悪いんジャ・・・」

「う、ううん、本当になんでもないの！　気にしないで！」

そうデスカ、と小首をかしげる彼。えへへへーと白々しく笑うユノ。なんとも気まずい。

ミレの実を二人して食べた後も空気は凍ったままだ。

そんな空気を払拭しようとユノは話題変換を試みた。

「それよりもさ！　その髪いい加減切らない？」

「エ、」

とたんに彼はうわあ藪蛇とでもいいそうな顔をした・・・といっても今彼の顔は伸びに伸びまくった黒髪のせいで顔の上半分は覆われ、感情その他は露出した口元と雰囲気でしかわからないのだが。確かに切るにはもったいない綺麗な髪だ。けれど。

「ねーえ、お母さん、散髪用のはさみどこにやったっけ？」
「きょ、拒否権は無しデスカっ！！？」
「はさみならそこの棚の三段目の引き出しにあるけど・・・どうするの？」
「ちょっとメアリサン・・・！」
「あのねーレオンの毛切ってあげようと思ってー」
「あの、ユノサン。そのレオンって俺の名前デスカ？俺犬デスカ？」
（※レオンというのはよく犬につけられる名前。　例：ポチ）
「あらよかったわねーレオン君」
「メアリサン・・・たまにその優しさが痛いデス・・・」

髪を切ることを嫌がるレオン（確定）をなだめすかして渋々後ろ髪をきることを了承してもらったユノは嬉々として美しい髪にはさみを入れる。

じょぎり、とはさみが音を立て、同時に黒々とした髪がぱさりとユノの足元に落ちた。
ユノは休まずにはさみを動かす。じょぎり、じょぎり、じょぎり。

「全く何も手入れしてないのにこんなきれいな髪だなんて・・・いいなぁ」
そうユノは嘆息する。
「？　ユノさんの髪も綺麗じゃないデスカ」
「私のは頑張ってこれなのよ。しかもまだまだ跳ねるし」

ユノははさみを動かす手を止めてミルクティー色の自分の髪をひと房とった。毛先がくるりと丸まってしまっている。毎朝これを直すのにどれだけの時間をかけているか。
いじいじと自分の髪をいじっているユノを気にかけたのか、レオンは自分の頭をのけ反らせた。その口元はにっこりと弧を描いている。

「おれはその髪いいと思いマスヨ？　ユノさんにあってマス」
「レオン・・・」

褒められることは少なかったユノの髪。それを無条件に褒められてユノは嬉しくなってレオンを後ろから椅子ごと羽交い絞めにした。

「ありがとぉっっ！」
「ちょっとユノさんはさみハサミッ！！」

ぎゃあと悲鳴をあげるレオンが何だか面白く、ユノはくすりと笑うと最後のひと房を切り落とした。

「どーよこれでー」
「おー上手ですね、ユノサン」
「でしょー？　だてに妹や弟の髪切ってないわ」

レオンはよほど髪型が気に入ったのか、いろんな角度から鏡をのぞき見る。
一人後片付けをしながらユノは日の角度を確かめた。

あと数分もすればあたりは真っ赤になるだろう。慌ただしくなったユノにレオンは気づいたらしく、どこかでかけるんデスカ？と尋ねてきた。

「あ、ちょっと隣の家に・・・」
「今カラ？　もうすぐ日が落ちマスヨ？」
「だから早く行こうと思って」
「近くって言っても女の子の独り歩きはいけマセン！　俺もついていきマス！」
「大丈夫よーそれにレオン病み上がりじゃない」
「病み上がりでも体力つけるために散歩は不可欠なんデス！」
いやに粘り強いレオン。時間が惜しいユノはしぶしぶレオンの同行を許可した。

「・・・・・・・・・・・雰囲気ありマスネェ・・・いかにも出ソウナ・・・」
「だからいったでしょ？　大丈夫？」
「あ、幽霊とかは平気デス。ただここまで立派なのは見たことがナクッテ」
これと同じような館がたくさんあったら住民の精神的に困る。
好奇心いっぱいのレオンをみて本当に犬のようだと思ったユノはしかしそのことを顔に出さず、二週間ぶりとなる扉を開けた。

「ディアンー久しぶりー」
「お邪魔シマスー」

それぞれ声をかけ、ユノはいつものように一室へと向かう。ディアンがいることの多い場所だ。
いろんなところに落ちている本に気を取られているレオンにひやひやしながら扉をあける。

とたんに壁にぶつかり、ユノはぶふと変な声をあげた。

「鼻がいた・・・ってあらディアン」
「・・・・・・・・・遅かったな」

壁だと思ったのはディアンの腹だったらしい。思いっきりあたってしまったが、ディアンは気にした風もなしにユノをじろりと見た。

「何よ。ミルクならちゃんともってきたわよ」
「なんでもない・・・ところで後ろの奴はなんだ」

レオンのことをすっかり忘れてたとユノは振り返った。思った通りそこにはレオンがいてじっとディアンを見つめている。
ディアンも気になったのか、レオンを見下ろしている。

ユノのちょうど目の前で肉食動物と犬の視線がかちあった。

すみつくもの

問題です。

犬と肉食動物がかちあいました。

どうなるでしょう？

「でこの文章はけものがただの獣ではないということを表すのだとおもうのデスガ！！」

「いや、ここに『けものはひかるいわをくだいた』とあるだろう。光る岩・・・つまり宝石だな。推測でしかないが、『とても堅い』と強調されているからにはおそらくダイヤだろう。よって光る岩＝ダイヤの塊と思われる。さらにダイヤは権力の象徴だ。その塊ということだから貴族、それもかなりの地位にあるものだろう。それを砕いたということは・・・」

結果：慣れ合いました。

ユノは椅子に深く腰掛けてはぁとため息をついた。

二人が議論を交わしているのはこの国に古くから伝わる童話だ。

美しい獣が人間に追われて神様に人間にしてもらうというよくある物語。
だが神様に会うまでの話、人間になってからの獣の冒険が面白く、子供にも大人にも愛される話だ。
ユノも好きな童話だが、彼らほどではない。

ディアンがこの物語について研究しているのは知っていた。なにしろこの館にある本のほとんどはけもの関係らしいから。
でもまさかレオンまでその変人の仲間だとは思わなかった。

「ねえ二人とも・・・」
「ではここの『けものはせかいのとびらをくぐって』とはどういう意味だとディアンさんはいうのデスカ？」
「世界の扉というのがよくはわからない。だが身分の差があまりにもあることを住む世界が違うというだろう。そのことを指しているのでは、と俺は思っている。つまり貴族へ獣はなったんじゃないか」
「・・・・・・・・・」

ここに住む世界が違うと実感している人間がここに一人いますよーといいだしたくともユノは言えなかった。

にしても、とユノは思う。
こんなに饒舌なディアンを久しぶりに見た。
前に見たときはうっかりディアンにけものの話を振ってしまったためひどい目にあったのだ。
よく話が合うものだ。ちょっとレオンに嫉妬してしまう。

ユノから不穏な空気を感じたのか、レオンの方がびくりと跳ね、ディアンはというと今気づいたように椅子に膝を抱え込んで座っているユノをみる。

鋭い視線にユノはぷいと顔を背ける。・・・すねている。

ディアンは怪訝そうにユノを見てすたすたと近寄ってくる。ユノは威嚇するようにより自身を引き寄せて縮こまった。
まるで肉食動物に怯える猫のようだとレオンは思う。
しかも肉食動物は猫の扱いに慣れていないようでどうにか猫をあやそうとしてはいるが、効果はない。

「・・・・・・・・何よ」
「食わないのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
野菜丸ごと渡しても逆効果だろう。

「・・・・・・・・・・・・・だから何よ」
「飲まないのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
そしてなんでそこでミルクを渡す。

レオンはによによと二人の様子をうかがった。とユノがそんなレオンに気づいた。やばい。
「・・・・・・レオン」
「ハイ？なんデスカ？」
じとっとした目をしたユノに睨まれる。がレオンはすっとぼけた。
そんなレオンにつかつかとユノが近づいてくる。

「そろそろ帰りましょ・・・ほら、用事は済んだし、貴方病み上がりだし」
「ア・・・そうデスネ」
てっきりによによしていたことを責められると思っていたレオンだったがそんなことはなかった。

一瞬呆気にとられたレオンだが、にっこりと笑っていった。

「でも、俺ここにいたいデス」

「・・・え？」

「というかここで暮らしたいデス。ねぇ、ディアンさん、ここで居候させてもらっていいデスカ？」

家事とかやりますからお願いシマス！！とディアンに頭を下げる。

そんなレオンにユノが慌てたように言う。

「ちょっと、何突然・・・」

「いいぞ」

「いいの！！？」

あまりに早い回答についユノはディアンを振り返った。そんなに簡単に決めていいものなのか。

しかしレオンはその返事に喜び、では先に戻ってこれからディアンさんのお世話になることをメリクリス家の皆さんに伝えてきマスネ！と飛び出していった。

ユノにはレオンの尻にぶんぶんと音を立てて尻尾が振られている幻覚が見えた気がした。

そのあと帰ろうと玄関を出たユノのあとをとことことディアンがついてきた。

「え、何？」

「送ってく。ついでにあいつを預かるとお前の両親にも言っとく」

「そう・・・」

6年間全く外に出なかったディアンがこんなにも簡単に扉からでてくるのを信じられない思いで見ていた。そういえば外はもう真っ暗だ。

今までは日が暮れる前に追い出されていたのでこんなことはなかっ

たとユノはぼんやりと思い返した。

ディアンがよもやユノとレオンが兄弟だと勘違いしているなんて思いもせずユノはゆっくりと歩を進めた。

「そういえば、最近行かなくってごめんね？食糧とか大丈夫だった？」

「一応の貯蓄はあるから問題はないが・・・」

「？」

こっちに目を向けてくるユノにディアンはなんでもないと話題を切る。

夜に入りかけた空気は少々肌寒い。ぶるりと震えたユノの目に我が家の温かい光が映る。

そのときディアンが何かつぶやいた気がしたがユノは気づくことはなかった。

すみつくもの（後書き）

「少々、さみしかった」

おかいもの

隣家に新たな住人が増えてから数日後、またユノは隣の館の門の前に立っていた。
その手にはいつものバスケットはない。今日は食べ物を届けに来たわけではないのだ。

「あ、ユノさんコンニチハー」

玄関の埃を掃いていたレオンがユノを見つけてにっこりと口元をほころばせた。
ユノも釣られてへらりと笑う。

「今日もありがとうございマス・・・ってアレ？」
ユノの手にバスケットがないことに今さら気づいたらしいレオンは小首をかしげる。
とハッと息を飲み、おそるおそる口を開く。

「ま、マサカ・・・ついにディアンさんに愛想を尽かシテ・・・・・・！！？ごめんなサイ、俺今一文無しなので二人分の食べ物を工面することはどうニモ・・・後生ですからせめて職ガ見つかるまで食べ物だけは恵んでくれまセンカ・・・・・・！！！？」
「ま、まって揺らさないで目が回るっ！」
生活がかかっているためか、必死な表情で肩を揺すぶるレオンにユノは慌てて押しとどめる。

「ち、違うの。　今日は確かに食べ物持ってないけどあげないってわけじゃないの」
「？　じゃあどうして・・・」
？マークを頭に浮かべるレオンにユノはディアンはどこ？と聞いた。

先日、ディアンを外に出すという目的は一応達成された。
しかし、ユノとしてはさらにその上の段階まで行きたい。
そう、例えば。

「ねえ、お買いもの行かない？」
「断る」
即座に後ろ姿で拒否されたが、そんなことでユノがめげると思うてか。さらに食い下がる。

「ほら、昼じゃないと手に入らない食べ物とかあるし。　野菜も新鮮なものがいっぱいあるよー　ミルクもあるよー　」
「う・・・」
ちょっと反応した。ユノはほくそ笑んだ。気分は猛獣を餌で釣る調教師である。
ほーらほーらと肉を目の前で振りかざしてやり、火の輪をくぐらせようとしているのだ。じっとりと汗が額ににじむ。
６年ここに通い続けてユノにはわかってきたことがある。この男は実は欲望に非常に弱い。
特に一番強いのは知識欲でその次に睡眠欲。その次くらいに食欲が

ある。

さらになぜかディアンは野菜とミルクが大好物なのだ。ユノがここにずっとこれたのはこの二つを持ってきていたからという理由も大きいだろう。・・・悲しいことに。

というかどう見ても成人済みの男の好物が野菜とミルクとは何事だ。

少々物悲しくなりながらユノは必死にディアンを誘う。

だがしかしこの猛獣は食欲よりも知識欲の方が勝っていたらしい。

「・・・・・・昼間に外に出るのは嫌だ。それにこの本の意見がなかなかに興味深くてな・・・。　そうだ、レオンを連れていけ。金ならそこの引き出しに入ってるから持っていけばいい」

それだけ言うと本のとりこになっている猛獣は餌に食いつこうとはしなかった。

「・・・・・・失敗したわ・・・・・・」

「まぁマァ。お金はあるんデスシ、お買い物を楽しみましょウ」

うなだれるユノにレオンは慰める。

二人並んで街の店が並ぶ通りに出たところだ。

「なによ・・・食べ物がなくっちゃ生きていけないのよ・・・本な

んて読めないのよ・・・」
「そうですネェ・・・あ、ユノサン、このニンジン安いデスヨ！１本６０ピレなんて破格の勢いデス！」（※ピレ　お金の単位　１ピレ＝１円）
「あらやだ本当！　ねえ、おじさんいいの？こんなに安くして」
「いいのいいの。　こいつ豊作だからってひいきの農家に押し付けらちまってなぁ・・・１本なんて言わず１０本で５００ピレでもいいぞ？」
「やだおじさんかっこいい！」
「ヨッ！太っ腹！で、これ２つとあれ２つさらにそれも入れて１００ピレ払いますけどいいデスカ？」
「おっ兄ちゃんなかなかやるねぇ・・・いいぞ持っていけ！！」
「ありがとうございマス！」

がっはっはと豪快に笑う青物屋の主人にレオンは笑顔で頭を下げる。にこやかに品物を入れた袋を奥さんから受け取ったユノはさっきの不機嫌はどこに言ったのやら、張り切ってパン屋の方角へ足を向けたのだった。

「いっぱい買いましたネェ・・・」
「そうね・・・さすがにこれは買いすぎたかも・・・」
「あ、でもこれぐらいだったら俺持てマスヨ？」
「え？そう？」

まあ一応男ですし・・・と笑うレオン。今二人がいるのは通りの端にあるミルク屋だ。
ふぇーと声をあげるユノ。

「私とあまり歳変わらないみたいなのにすごいねぇ」
「歳が変わらない・・・ッテ？」
「え？レオン１６歳じゃないの？　私１４歳だけど」
「・・・・・・・・・」

口を開閉していたレオンだったが、しばらく頭を抱え、唸るような低い声で何かをつぶやいた。
ユノはその言葉を聞き取れず、というよりまるで知らない言語だったため、ただ首を傾げていたがやがて何かをあきらめたようにレオンが言った。

「俺・・・１９歳デスヨ・・・・・・・」
「・・・・・・・え？・・・・・・・は？」

思ってもみなかった事実にユノはただ口をあけていることしかできなかった。

おしゃべりもの

「１９・・・・・？」
「ええ、ハイ。１９です」

ユノは驚愕で目を開いた。

目の前でそんなに俺若く見えますかネェ・・・と苦笑しているレオンの体つきはどう見ても１９歳のそれではない。なんか細いし、身長もあまり高くはないし・・・とはいえユノよりは２０トルほど高いのだが。（※トル　長さの単位）
１９歳というのは大人の仲間入りをしているものなのではないのか。もっとがっしりしていているものではないのか。
なにより

「え・・・うそまさかそれでノクス兄さんと同い年なのっ！！」
「それでってなんですかそれでッテ・・・」

おののくユノにがっくりするレオン。

「というかお兄さんいたんデスカ。家にはいませんでしたヨネ？」
「ああ、うん。今家いないから・・・王宮で働いてるの」

ミルクを受け取ってまた二人は歩きだす。時刻はもうすぐお昼を過ぎようとしていた。
館についたらレオンが何か作ってくれるというので、ユノは期待を胸に両手いっぱいに買い物袋を抱えなおした。

「王宮・・・デスカ？それってすごいことなんジャァ・・・」
「そうなんだけど。でもなんか下っ端の仕事しかもらってないみたいよ。」

レオンがユノの方を向く。片手でユノが持っているものよりも大きい紙袋を抱え、もう片方の手は二つの手提げで埋まっている。重そうだが、レオン曰くまだまだいけるとのこと。

「そうデスカ。どんな仕事ヲ？」
「なんでも動物探してるんだってー。今の王様の5番目の王子様が探してるとかなんとか」
「ほゥ・・・ペットでも逃げたんですカネ？」
「ね・・・そんなことで他人を動かすのはどうかとも思うけど」

ユノはふうと息を吐いた。手の中の荷物が重い。

「でも私いいなぁって思うの」
「何がデスカ？」
「ノクス兄さん。学校行けてそのあとも下っ端とはいえ働けるんだもん」
「あれ、ユノさんは学校にはいってないんデスカ？」
「いってないよーっていうか学校行けるのは男だけだし」

ユノは苦笑しながら言った。レオンが意味がわからないといった顔つきをしている。他国では制度が違うのだろう。ユノはこの国の教育制度について話し始めた。

「あのね、9歳以上の男の子は学校行くのを許されるの。それから確か18歳まで勉強していろんなところで働くの。ノクス兄さんみたいにね。女の子は読み書きもできないのが普通なんですって。あ、

貴族の子は家庭教師とかつけられるらしいけど」
「エ・・・でもユノさん、読み書きできるじゃないデスカ」
「簡単なところはノクス兄さんが羨ましくって駄々をこねて教えてもらってたの。でもそのうちノクス兄さんは学校が忙しくなって教えてくれなくなったし、母さんはシュリンとノリンに大忙し」
「あ、シュリンとノリンってあの双子ノ？シュリンが男の子でノリンが女の子ノ」
「そう、そっくりでわけわかんないでしょ」
「エエ、もう見分けがつかないから名前あまり呼んでない気がシマス・・・」
「賢明な判断だと思う。あの子たちお互いに一緒にいるのが好きなんだけど自分がもう一人と間違えられるのは嫌いだから」

ユノはもうじき8歳になる可愛い兄妹を思い出してくすりと笑った。そのうちシュリンが学校へ行ってしまってノリンがぐずるのは確実だ。

「女の子は学校に行けないんデスカ・・・不公平デスネ」
「しょうがないわよ、家事とかやることはいっぱいあるんだから。子どもがみんな行ってしまったら家の中では人手が足りないわ」
「そうですケド・・・」
「でも私はあきらめなかった」
「え、ちょっとなんか雲行きが怪しくなってきたんデスケド」

ふふふ、と笑うユノにレオンが数歩下がる。それにも関らずユノは口を開いた。

「私がなんで館に行くことになったか知ってる？」
「エエ。ディアンさんから聞きました。なんでもボールが館の中に入ってきてそれを取りに来てからずっといついてるとかナントカ・・

・」
「そうそう、初対面で『消えろ』とか言われたのよ。ひどくない？」
「まぁそれは確カニ」
でもディアンさんならいいそうだと納得顔のレオンにユノは楽しそうに言う。
「そのときね、怖くてたまらなかったけどまた次の日行ったのよ、食べ物もって」
「アア、それはディアンさんも不思議に思ってたみたいデスネ。なんでなんデスカ？」
「本よ」
「・・・・・・へ？」
「少しでも読める本があるのを見つけてしまったのよね、私。それからいてもたってもいられなくなって、食べ物持って館に行ったの。あそこ、本だけは腐るほどあったから。ほとんどけもの関係だったけど」
「つまり学校で習わないかわりに館の本で学んダト・・・」
「そう。まあじきに飽きたんだけど最初は本めあてであそこに通っていたわね」
懐かしい、と目を細めるユノ。しかしレオンはあれ、と何かに思い当ってそのままユノに質問した。
「最初ッテ・・・じゃあ後からめあてが別のものになったんデスカ？」
「ああ・・・わからない？」
「まったくわかりませン」
「ディアンよ。あのダメ人間加減には子どもながらに心配になったのよね。気を使って食べ物持っていってもほとんど手をつけないし、

声かけないと寝ないし。しかもお肉食べないのよあいつ」
「・・・・・・・・・納得デス・・・」
「いつも野菜とミルクしか消えてなくって、メインディッシュのはずのお肉が『あれ・・・？なんでぼくまだここにいるの・・・』と言わんばかりに残されてるのを見た時には愕然としたわよ」
「それは体に悪いデスネ！というか食べ物を残すという行動自体が許しがたいデス！」
「そうよ、作った人の気分になればいいんだわ！」
「そうデスヨ！よし、今夜のメニューは決まりデスネ・・・」
「なに？なんなの？」

レオンはにっこりとして言った。
「お肉のフルコースデス。ふふふ・・・腕が鳴りマスネ・・・」
「やだそれおいしそう！私も食べていっていい？」
「どうぞドウゾ。ディアンさんに食べさせるには骨が折れそうですカラ」

どうやら今日帰るのは遅くなりそうだ。ユノは嬉々として館の門をくぐりぬけた。

館の門の前で『ディアンの好き嫌いをなくし隊』が結成されたとはつゆ知らず、ディアンはただ黙々と本に向かっていた。
たまにカリカリとペンを走らす音が部屋に響く。その静けさが今はむなしいと感じてしまう己にディアンは頭を振った。
どうもあの子どもたちに毒されてきている。それとも自分の集中力がなくなってしまったか。

無理やり視線を本に戻すとある一節が目の中に飛び込んできた。

『いまでもおうさまはけものをさがしています』

ただの童話の話。ここから隠されている事実を読み解くのがディアンの仕事だ。

失った記憶を取り戻すために。

館の中が騒がしくなってきた。ディアンは今日の仕事はこれ以上進まなさそうだとため息をついた。

おしゃべりもの（後書き）

タイトルは大抵最後に「〜もの」と付けるのが決まりなので（私の中で）無理矢理感が漂いますが軽くスルーしてやってください。

たべもの

ディアンは食卓にある光景を見て盛大に顔をしかめた。
ステーキにハンバーグにビーフシチュー・・・考えつく限りの肉料理に申し訳なさそうにパンが数個。
野菜など一枚も見当たらない肉肉しい光景は体に悪そうだ。
色どりなんて知るものか！とばかりに茶色一色に染まったテーブルにまだまだ料理を追加する二人。
数分して料理が出揃うとぼうっと立っているディアンに気づいたのか、二人してにやにやとディアンの顔色をうかがう。

そんな二人の目を無視してディアンは食卓に着いた。
レオンもユノもそれに従い、ナイフとフォークを扱うディアンの手をじっと見る。が、その手はあまり動かされることはなく、すぐに食器はかちゃんと置かれてしまった。
それから動こうともしないディアンにユノはむっとしながら、レオンはいつもの笑顔で首をかしげながらそれぞれ口を開く。

「なによ、何か問題でも？」
「好き嫌いはいけませンヨー？」
「好き嫌いはしていない」

はあと息をついてディアンが言う。その割にはあまり食事に手をつけてはいない。
ぐいとミルクを飲みほすとさっさと席を立ってしまう。

「作業に戻る」
「ちょっと、まだ食事は終わってないわよ！」

「そうデスヨー。ちゃんと食べないと体力持ちませンヨ？」
にこにこと笑ってレオンがディアンの行く手を阻む。ディアンはレオンの前に立ち止まるとその鋭い眼光を光らせた。
「そこをどいてくれないか・・・？」
「断りマス」
むうとした表情のディアン。にっこりと笑うレオン。だが各自背負うオーラは猛々しい。片方では肉食獣が唸り、もう片方では犬が牙をむく。
「いいデスカ、食事のバランスは大切なものなのデスヨ？確かに野菜も大切デス。しかしお肉を欠かしてしまうと血が少なくなっタリ、筋肉が衰えてしまって大好きな本も読めなくなりマスヨ？」
「・・・それは困る」
ちょっと躊躇したディアンの片腕をユノが引っ張り、食卓へと導こうとする。肉食獣のオーラが薄まった。
「そうよ、それに二人で頑張って作ったのよ？食べてくれないともったいないじゃない！」
「むぅ・・・」
真剣にディアンの体を心配してくれていることはわかる。ディアンもそこまで鈍感ではない。
ほかほかと湯気を立てている料理は確かに美味しそうだが、ディアンはそれでも首を横に振った。
「やっぱりいらない」

「どうしてよ！」
「気に入る料理がありませんデシタカ？レシピを教えてもらえばがんばって作りマスガ・・・」
食いさがる二人にディアンは迷いながら口を開く。
「えーと・・・実は肉料理を食べると持病の癪がうずいて・・・」
「なによそれ。そんなの聞いたことないわよ」
「そもそも癪は食べ物とは関係ありマセン」
目を泳がしながらいうディアンにユノとレオンはじとっとした目を向けた。
嘘くさい。
「それなら・・・肉料理は母の敵で絶対に食べないと決めていて」
「なによ母の敵って。食中毒？」
「料理のせいにするのは頂けませンネ。恨むなら料理人デス」
顔にいくつか汗を浮かび始めたディアンにさらに二人は詰め寄った。
そんな言葉でだませるとでも思ったのか。
「じゃあ肉料理を食べてはいけないと死んだ父からの遺言で」
「じゃあってなによじゃあって」
「遺言ナラ・・・仕方ないデスネ・・・」
「！！？」
どう聞いてもいいわけにしか聞こえない言葉にレオンが納得したことに驚いたユノはレオンを見やる。
しかし、レオンは心の底からその言葉を信用したらしい。腕を組み、うんうんと頷いている。

納得しきれないユノはディアンを問い詰めようとディアンに向き合ったが、時遅く、すでにばたんと扉が閉まられていた。

「ちょっと、なに納得してんのよ！」

ユノはディアンを止められなかった気持ち少々、あんな言葉を信用したレオンを攻める気持ち多数でレオンに詰め寄った。

そんなユノをどうどうと押しとどめながらレオンは言う。

「ダッテ、遺言は絶対守らなければならないのデスヨ？さぁユノサン、冷めないうちに食べてしまいまショウ」

「食べるけど！ディアンのために作ったものなのに・・・」

ユノは力なく足元に視線を落とした。

肝心の本人にあそこまで食べることを拒否されてしまうとさすがのユノも悲しい。作っている最中の楽しさがどこかに吹き飛んでしまった。

そんなユノにレオンがやさしく言葉を掛ける。

「そうですね、でもディアンさんも作ってくれて嬉しかったと思いマスヨ？だってほんの少しとはいえ食べてくれたじゃないデスカ」

「そうだけど・・・」

ディアンが手をつけた肉料理と言えばハンバークの端っこの端っこ。肉と言えるのかどうかわからないほど少量だ。それを食べたというのかユノには分からない。けれどレオンにとってそれで充分なのだろう。

「それにあそこまで拒否するのには何か理由があると思いマス。ユノさんにああまで言われても拒否したくらいですカラ」

「理由ね・・・そうよね・・・でもそれって私達にも言えないこと

？」
「人にはいろいろ秘密があるんデス。そういうものデショウ？」
レオンはそういうとさぁサァと言ってユノを椅子に座らせた。
「とにかく俺たちがやるべきことはこの料理をいかにして無くすことデスヨ。この量は迫力がありマス」
「いざとなったら家に持って帰るけど・・・多いわね。食べきれるかしら？」
「食べなかったら料理と素材に申し訳ないデス。残さず食べまショウ」
「そうね、では神と食物に祈りを捧げて」
「いただきマス」

かちゃかちゃと食器の音が鳴り始めたのを扉越しに聞いてディアンは胸をなでおろした。
あれ以上はきっと胃が受け付けない。
何故自分が肉を食べられないのかは分からない。魚なら食べれるのに。
ディアンは頭を掻き、どさくさにまぎれて持ってきたミルクの瓶のふたをぱかりと開けた。

たべもの（後書き）

たまに活動報告のほうで設定ともいえないような何かを呟いているので気になる方はどうぞ！

亀のテンションが気持ち悪いことになっていますが！

わすれもの

「こんにちはー・・・？」

なんかいつもと違う。いつものように館の扉を開けたユノは違和感に首を傾げた。
そして本だらけの部屋に入ってディアンの後ろ姿を見つけるとその原因に気づいた。

「あれ？ディアン、レオンは？」

館に来るとにっこりと笑ってバスケットを持ってくれるレオンが来ない。
来ないときは大抵この部屋でディアンを議論を交わしていてその声が扉を閉じていても聞こえるほどなのだが、その声も聞こえない。
本に没頭しているのかと思えば部屋のどこにもレオンはいない。
こちらに後ろを向けていたディアンはもぞりと動いてユノを確認するとまた本へと戻る。

「ああ、犬か」
「犬って・・・」

確かにその名前を付けたのはユノだが、さすがにそんな風に言われると可哀想だ。
それに犬につけることの多い名前ではあるが、もともとの意味は『勇敢な・猛々しい』である。
ユノの視線に非難の色が含まれたのを感じたのか、ディアンは冗談だ、と何でもなさそうに言った。

「レオンなら材料が足りないとかで買い物に出かけた。古本屋にも寄って行くともいってたな」
「ふぅん・・・じゃあ遅くなりそうね」

ユノはほこり臭い部屋の空気に顔をしかめ、つかつかと窓へと歩み寄る。
その動作に何か気づくものがあったのか、ディアンは自分の近くにあった本をおもむろにもって移動を始めた。
ユノがカーテンと窓を解き放って後ろを見るとディアンは窓から入ってくる光と新鮮な空気を逃れるような場所に腰を納めていた。そこまで行くのに躓いたのか本の山がいくつか崩れ、当の本人はそんなこと知るかと言わんばかりに本とにらめっこをしている。

ユノは相変わらずなディアンにふうと息をつくと自分も暇つぶし用にその辺に落ちている本を手に取る。そしていつの間にかユノ専用になりつつある長椅子へと近づいてすとんと腰を下ろして本を開いた。
本の題名は『けものにおける食物の由来』・・・なんのことだか。

レオンが来る前となんら変わらない風景。まるでレオンはここに最初からいなかったみたいだ。
もし私がここに来なくなってもこの男はまるで変わらないんだろうな、とユノはぼんやりと考えた。
食べ物の確保には苦労しそうだが、ディアンなら何とかしそうだ。
ユノが来る前でも一人でこの館に住んでいたのだから。

日の光と空気は睡魔をおびき寄せる。ユノはなんとか眠気と戦おうとしたが、徐々に落ちていく瞼はどうやら理性よりも本能の味方をしたらしい。ユノはおとなしく白旗を上げ、長椅子に横になって体

を小さく丸めた。

ディアンには記憶がない。少なくともこの館に来る以前のものは。

それからは長いこと外に出ず本を読んできた。
この中に自分の記憶の手がかりがあると信じて、長いこと光にも当たらずにただ読んでいた。
途中から話を解いていくのが趣味のようになってしまったが、自分の記憶のことが最優先なのには変わりはない。
読んで、読んで、読み続けて一体どれだけの時が経ったのか。
外の景色がわからない以上知る術はない。

ある日のことガチャンと窓ガラスが割れた音がした。そしてすこししてぎぃと館の扉を開く音。
気になって音が鳴った場所に行くと転がっていたボールと柔らかい髪を持った少女。

自分と同じ種類の生き物がいる。
そのことにディアンは怯え、そして威嚇した。

「消えろ」
きえてしまえ、おれのまえから

それから全く訪問者などいなかったこの館に毎日小さな影が現れるようになった。

小さな影はディアンにどんなに脅されても来ない日はなかった。
どんなに寒い日も、暑い日も足しげく通ってきた。

ディアンは慣れ合うつもりはなかった。興味を抱くつもりもなかった。
少女がいずれいなくなってもいいと思っていた。むしろいなくなれと思っていた。

でも

手の中の本を読み終わり、ディアンはおもむろに近くの本を漁った。が目当ての本は見つからない。
さっきまでいた位置まで戻ってじっと本にまみれた床を見つめるが、そこにも本はなく、軽く眉間にしわを寄せるとふと長椅子で眠るユノを見た。その手には『けものにおける食物の由来』

ディアンはのこのこと長椅子の傍まで行き、だらりと弛緩したユノの腕から本を奪ってそのままそこでページをめくる。そして何かに気づいたようにユノの寝顔を見る。
目を閉じてすうすうと息をするその姿は安心しきっていてディアンは眉をひそめた。
ゆっくりとユノを起こさないように立ち上がると自分の寝室へ繋がる扉を開く。戻ってきた腕の中にあるのは毛布。
それをそろりとユノに掛けると自分はその横に座り、肌触りのいいユノのくるりと柔らかい髪を手の中で弄ぶ。
たまにこうしてユノの髪で遊んでいるのだ。休憩代わりにちょうど

いい、とディアンはそのまま長椅子に体を預ける。
そのままディアンは睡魔に襲われ、手の中の本がこてんと床に落ちた。

「ただいまかえりまシター。ディアンサン、待たせてすいませン！すぐごはんにしますカラ・・・アレ？」

扉を開けたレオンは姿の見えないディアンに首を傾げた。いつもなら顔ぐらい合わせてくれるはずだ。
もしかして遅すぎて怒らせてしまったか。レオンは焦って室内を見まわした。
すると二人分の寝息が聞こえ、レオンは笑みをこぼした。

長椅子に丸まって眠るユノにそれに寄りかかるディアン。

心底幸せそうな二人を起こすのは忍びなく、レオンは夕日の差し込む窓とカーテンを閉めるとそっと扉を閉じた。

にちじょうもの

ユノの朝は忙しい。

朝早く起きて近くの共同の井戸から水を汲み、泡だらけにしながら洗濯をすると太陽が昇る頃合いになる。
洗濯ヒモを木々の間にかけて洗濯物を干すと家からいいにおいがしてくる。メアリが朝ごはんの準備をしているのだ。
ユノは洗濯物を入れていたユノの胴ほどもあるバスケットを持ち上げ、家の中に入って行った。

台所ではメアリが竈でことことスープを煮込んでいた。竈の中では炎が勢いよく燃えていて水の冷たさに慣れた手にはいささか厳しい。
今日のスープはユノの大好きなツラという白身魚が入ったものだ。パンに挟んで食べるとスープがパンにしみ込んでとても美味しいのだ。
もうすぐできるわよというメアリの言葉を受け、ユノは双子を起こすために二階へ階段を駆け上って行った。

「ほら、シュリン起きなさい！ノリンも！」
「うーやだー・・・いてぇ！ねえちゃんのばかー」
「むー・・・」

布団にしがみつくシュリンをベットからたたき落とし、眠い目をこするノリンには水差しから冷たい水を渡してやる。起きぬけに冷たい水はちょうどいい眠気覚ましになるのだ。
んくんくく、と喉を鳴らして水を飲むノリンを見て俺も飲む―と騒ぐシュリン。

はいはいとまた水差しから水を注ぎ、シュリンに渡してやる。
並んで水を飲む双子を急かし、一階の食堂へと降りていく。
ここまできてやっとユノは朝食にありつけるのだ。

「あ、ユノ、ちょっとお使い行ってほしいんだけど」
「いいけど、余分に買ってきてもいい？隣に分けたくて」

食器を片づけているとメアリから買い物を頼まれたユノは急いでメモと財布をつかんでドアを開けた。

「お、ユノじゃん。何？買い物？」
「そう、いきなり母さんに頼まれちゃって。ここで最後なんだけど」
パン屋の看板娘ならぬ息子のミリスに声を掛けられたユノは苦笑して見せた。
二人の関係を表すのなら幼馴染とでも言おうか。とはいえ向こうの方が少々年上なのだがまあそれも一年の差だ。
ふうんと気のない様子でもカウンターから出て必要なだけパンを取ってくれるのはユノにとって有難かった。
何しろ今腕は荷物でいっぱいでどうにもパンを載せるトレーまで持ち上がりそうになかったからだ。
レオンを連れてくればよかったと呟くユノの心の中を知らずミリスはふと話を変えた。

「そういえば前連れてきてたあのなんか顔見えない奴・・・なんだっけ」
「ん？レオンのこと？」
思いかけず出てきたレオンの話題にユノはきょとんとさせた。そうそう、とミリスが相槌を打つ。小さな声で犬？と呟かれたような気

がしたがユノは聞こえないふりをした。

「あんな奴いたっけ？見おぼえないんだけど。っていうかあの後からよくうちにくるんだけど」

「ああ、最近近所で暮らし始めたの。　あの時はちょっと道案内みたいなもんで」

「嘘つけ。完全に荷物持ちだったろ」

「・・・はい」

問い詰めるようにたたみかけるミリスの言葉にユノは肯定するしかなかった。

へこたれずへへーと笑うユノにミリスははあとため息をつくとさっさとカウンターに戻ってパンを袋に包み始める。

「はい。全部で２３００ピレね」

「あ、ちょっとまって」

わたわたと財布を取り出して銀貨２枚と銅貨３枚を取り出そうとしているユノ。それをミリスは行儀悪く頬杖をついて見る。この時間客は少なく、ユノが多少もたついても問題はなかった。

どうにか財布を手提げから引っ張り出して硬貨を出しているユノを見ていた緑色の目がふと後ろへと注がれる。

「あれ？そこにいんのノクス兄じゃね？」

「へ？」

硬貨を渡してパンを抱えたユノが後ろを振り向くとガラス戸の向こうでノックしつつ笑っている青年が見えた。

短い栗色の髪を整え、灰白色の軍服を着て青い目を悪戯っぽく細めるその人は確かにメリクリス家の長男であり、ユノの兄でもあるノクス＝メリクリスだった。

にちじょうもの（後書き）

補足：
金貨＝１００００ピレ
銀貨＝１０００ピレ
銅貨＝１００ピレ
紙幣＝１～９９ピレ
というのがこの国の貨幣事情です。

さがしもの

「ノクス兄さん！」
「おー元気だったかユノー」

目を輝かせて手の中の荷物を気にせずノクスへと飛びつくユノ。そんなユノをノクスはくしゃりとした笑顔で軽々と抱き上げてしまう。パン屋の中での兄妹愛に出くわしミリスははあと息をついた。

「メリクリスのお二人さん、仲がいいのはいいけれど出来るなら外でやってくれない？つーかノクス兄でかい。商売の邪魔」
「それは悪かったなぁ。ほら、ユノ出るぞーあ、荷物もってやるから！」
「あ、うん。じゃあまた明日ね、ミリス」
「はいはいまたのおこしをおまちしておりますー」

さっさといけとばかりに手を振るミレスに追い立てられ、ユノとノクスは店の外に出た。
ノクスはユノの荷物をすべて取り上げ、抱える。ユノが持つだけでも息が切れそうな大荷物はノクスにかかると何でもないようだった。軍服の下のたくましい腕が荷物に安定感をもたらし、荷物持ちには
　もってこいの人材だ。
ノクスがついているのは文官の地位だ。だがその体格、趣味でやっている筋トレでついた筋肉のためそう思われないことが多い。ましてや男にしては細いレオンと比べれば本当に同じ年齢か、と疑いたくもなるだろう。

「ノクス兄さんなんか動物追ってるんじゃなかったっけ？なんでここに？」
「あーそうそう、上司が鬼畜でな。地方を飛びまわされてついにここまで来たんだよ。寄ったついでに家族の顔でも見てみようかと。あと俺が探してるの動物じゃないから」
「え？でも探してるって手紙に・・・」
「ああ、探してるのは間違いじゃない」

首をかしげるユノににっかりと太陽のような笑顔を向けてノクスは言った。

「けものだよ」

「・・・けものってあの？」
「そう、あの童話にでてくる人になった美しいけもの」
「・・・命令してるのって誰だっけ」
「第5皇子。つまり俺の上司」
「・・・この国って大丈夫？」
「俺も不安に思う・・・いやでもちゃんと王族がけものを探すのには意味があるんだって」

心なしか落ち込んだ声の会話は兄の国を弁明する言葉で遮られた。本当に？と目で訴える妹を目で本当にと答え、歩きながらノクスは理由を話そうと口を開いた。

「けものの話の最後の方知ってるか？」

「えーと王が欲のためけものから種を奪い、それでけものが嘆いて人の前に二度と姿を現わせないことを誓って、王はその種のおかげで裕福になって国も大きくなったけどけものに会いたいからずっとさがしてる・・・んだっけ」
「そうそう、よく覚えてたな？」
「えへへー」

まさか隣人に嫌というほど読み聞かせられたなどといえない。
感心したようにノクスはユノの頭をがしがしといささか乱暴になで、荷物を持ち直した。

「つまりそういうこと」
「え？そういうことって？」
「王様、王族が探してるから俺が探す。まあ所詮下っ端の方には情報なんてくるわけないよなー」
「んー・・・ノクス兄さん大変なんだね？」
「そうそう、まあなんか情報あったらくれよ？っとついた」

ただいまーと久しぶりの我が家にノクスの声が明るく響く。久しぶりの家族の歓迎に家がいつも以上に騒がしくなる。ユノも顔をほころばすとノクスの後に続いて家の扉をくぐった。

昼食を食べた後。いつもこの時間からがユノの自由時間であり、館へ訪れる時間ともいえる。
食糧を持ってそのまま館に居座るのが常であるが、今日は久しぶり

の家族団らんとしゃれこみたかった。
ということで。

「ディアンー？レオンー？いるー？」

今日は部屋に入り込まず、玄関ホールで帰ろうと声を張り上げた。
しばらくしてぎいと本だらけの部屋に続くドアが開けられ、出てきたのは埃まみれのディアンだった。

「めずらしいわね、ディアンが出てくるなんて」
「レオンは本屋を見てくるそうだ。ついでによさげな本があったら買ってくるようにとも」
「へえ」

そのままディアンがバスケットの中身を確認するのを手持ちぶさたに眺める。
ディアンがいつも薄暗いところにいるので、その髪や目の色がはっきり見えたことはない。
顔立ちはわかるのだが、それも薄暗闇の中でしか見たことがない。
ディアンを外に出したいというのはディアンをはっきりみてみたいというユノの些細なわがままでもあるのだ。

「これでいいの？」
「まあ明日またもってきてくれれば嬉しいが・・・」

そういってディアンがバスケットを閉めようとしたその時、ぎぎいとユノの後ろのドア・・・つまり館の入り口が空いた。外の光が館内に差し込み、ユノは目を細めた。
光を背負うように人影が館の中に入ってくる。

「おい、ユノ？なんでお前こんなところに・・・っておい」
人影はノクスだった。
隣にある幽霊屋敷に妹が行ったところを見て心配になったのだろう。
しかし今ノクスの目は信じられないものを見るように開かれていた。
兄のそんな姿を今までユノは見たことがない。
誰をみてそんな顔をしているのだろう。ノクスの視線を追っていくと光を逃れてユノから距離を開けたディアンがいた。
バスケットはその手になく、警戒心をあらわにして侵入者を見定めようとしている。

歩いて２０歩がそこらの距離。けどなぜかその距離が嫌に長く感じてユノは距離を縮めようとディアンに近づこうとした、が腕をつかまれて進むことができない。
誰だと振り向くといつにもまして真剣な顔をした兄がいた。そして確信を込めて口を開いた。

「・・・第３皇子殿下。行方不明のはずの貴方が何故このようなところに？」

あにきもの

かつて皇子は5人いたのだと聞いたことがあった。

病弱だった第1皇子はまだ若いうちに病気でなくなり、
気性の荒い第2皇子は王家のしがらみに嫌気が差して国を放浪中。
幼くとも賢いと有名だった第3皇子は何者かに拐かされ、行方不明に。やがて亡くなったとされた。
皇太子でもある第4皇子は日々王族としての職務を全うし、
最後の第5皇子はその補佐として陰ながら支えているという。

それもこれも街に流れる小さな噂話。王族なんて日々の生活では税収以外あまり関係はなく、ユノは一生その姿さえも見ることはないと思っていた。

「・・・第3皇子？」

ディアンは警戒しながらも言葉を反芻した。
ノクスはかしこまりつつ慎重に口を開く。

「そうではないとは言わせませんよ。見たのは一瞬でしたがその漆黒の目は王族、それも直系独特のもの。さらにその御姿から判断すると10年前に拐された第3皇子のシーラティウス殿下しかいらっしゃいません。なにより」

ノクスの目がひたりとディアンを見据える。
「王宮に飾ってある幼いころの第3皇子の絵が成長した姿にそっくりです。これで別人はあり得ないと思われますが」
ユノはただわけも分からず茫然としているだけだった。兄は一体何を言っているのだろう。ディアンが皇子だなんてそんなことあるわけがないじゃないか。
妹の混乱をよそに兄はただただ言葉を紡ぐ。
「貴方が何故このような場所にいらっしゃるのか、生きていたなら何故今まで姿を現さなかったのかは分かりません。ですがこのような場所よりも貴方にふさわしいところがあるでしょう。・・・王宮にお戻りいただけませんか、殿下」
ノクスの言葉にディアンはゆるりと動いた。
すたすたと跪くノクスと立ちすくむユノの近くまで来て落ちていたバスケットを拾って中身を確認する。
何も異常はなかったのか黙ったままパタンとバスケットのふたを閉じるディアンにしびれを切らせたのか、ノクスが身じろぎする。
「殿下」
「違う」
呼びかけるノクスにディアンは見もせずに否定した。
「俺は少なくともその殿下とやらじゃない。ディアンだ」
「・・・あくまでもそうおっしゃるのですね？」
ゆらりとノクスが立ちあがる。その様をディアンはただじっと見ていた。ユノは何をしたらいいのか分からずおろおろと状況を見守る。

何とも言えない空気のなか、ノクスはにゃはっと破顔した。

「殿下じゃなくてただの一般市民ならもう敬語使う必要ないよなー？あーもうやだやだ敬語とか。１０歳老けこんだ気分になるよ全く。そもそも身分が上だったら敬語つかえってあれじゃね？職権乱用じゃね？どうせ言ってることは同じなんだからぱーって言っちゃえば楽なのになー」

「・・・ちょっとノクス兄さんそれはあんまりじゃあ」

あー肩こったと首を回すノクスにユノが力なくつっこむ。そうだ、こういう人だった、この人は。

さっきまでの緊迫とした空気などお構いなしにディアンに話始めたノクスにユノはため息をつくと先に帰ってるね、と言葉を残して扉から出て行った。

ユノが出て行ったことを確認するとノクスは改めてディアンに向き直った。

「どうも、さっきはすみませんね。俺はノクスだ。気づいてると思うけどユノの兄でね。まあ宜しく頼むよ」

そういって差し出された手をしかしディアンは無視する。冷たいなーとノクスは苦笑し、手を降ろした。

「まあ冷たさなら俺の同僚も負けてないけどなー。ああでも向こうは少しぐらいかまってくれるけど」

「何の用だ」

くだらない雑談を始めようとするノクスの言葉を切り裂き、ディアンが問う。
わざわざ妹をあきれさせ先に帰らせておいてまだここに残るのだから何かあるのだろう。
ノクスはああ、と頭を掻いてから本題を口に出す。

「いやあ俺ちょっとさがしものしていてね。最近ここでそれ関係の本ばかり買われているって噂で聞いてまあちょっと見させてもらおうと」
「けものか」
「そうなんだけど。えっ本当にここなのか？けもの関係の本ってたくさんあって玉石混合だから集めづらいんだけど」

驚いて目を丸くするノクスにディアンはちょっと待ってろと言って奥の部屋へ行き、数冊の本を抱えてきた。
どさどさと腕の中に落とされた本をぱらぱらとめくってノクスはカッと目を見開いた。

「ちょっとまてよ・・・この本国立図書館にも置いてない奴・・・！この資料も見たことない・・・！」
「必要なものがあればいえ。持ってきてやる」
「あ、中には入らせてもらえないのね・・・」

ぎらりと眼光で凄まれてノクスはあははと乾いた声を出す。どうやら完全に警戒されているらしい。

「用がないならさっさと帰れ。俺は暇じゃない」
「はいはい、また数日の後に来させてもらいますー。あ、あと最後に質問が」
「なんだ」

外に出ようとしてふいに振り返ったノクスにディアンが答える。どうやらノクスがちゃんと出るのを見るまで動く気はないらしい。ノクスは肩をすくめてまあなんでもないんだけどさ、と前置きをして聞く。

「赤い目の人間、みなかった？」

顔には笑顔が張り付けられているが青い目はディアンを捉え、その動作におかしいところがないか冷静に分析している。
ディアンはその目に動じずに見てない、と答えた。
実際館から外に出たことはあまりないのだから人間自体ユノ、レオンを除けば見ていない。
ディアンにおかしなところがないと判断したのか、ノクスはそう、とそっけない言葉を返し、館から出て行った・・・と思うとものすごい勢いで引き返した。

「ごめん、これがほんとのほんとに最後。ちょうききたいことあるっす！」
「・・・さっさといえ」

うんざりしたようなディアンの言葉にノクスは先ほどと同じくらいの笑顔でディアンに聞く。
目は笑っていない。

「うちの妹とどういう関係？」
「・・・・・・・・・」

ディアンは沈黙だけを返してパタンと館からノクスを閉めだしたのだった。

まつりもの

「エ、昨日ユノさんのお兄さんが来ていたんデスカ？」

レオンが驚いたように言う。台所でレオンの手伝いをしていたユノはそうそう、と頷いた。

「今日はなんか部屋にこもって本読んでる。いい資料が見つかったんだって」

「へェ・・・さすが王宮務メ。責任感あるんデスネェ」

「いや、なんか『もうめんどくせー上司の鬼畜ー過労で倒れて一ヵ月くらい病室に監禁されればいいのにー』っていってたよ」

その時の上司を倒れさせてやろうと計画を練るノクスの顔はとても楽しそうだった、とユノは語る。

ちょっと共感シマス、とレオンが言う。

「仕事とか無性に休みたくなる時はありマスヨ。休憩が充分取れないとそう思うのも当然じゃないデスカ？」

「今日昼まで寝てたけど」

「アア・・・」

フォローの仕様がない、とレオンは肩をすくめる。

ユノは皿を拭きつつレオンを見上げた。

「仕事とか・・・てレオン仕事してたの？」

「エ、・・・ああ計算とかデスネ。そういえばそのお兄さんなんでけものを探しているんデスカ？」

ほほ笑むレオンの顔はどこかぎこちない。さりげなく話題を変えられたことにユノは気づいたが、何かあるのだろうと気づかなかったふりをしてレオンの質問に答えようと口を開いた。

「んーと上司が探すから下っ端の俺が探すんだっていってたよ」
「上司って王子様デショ？下っ端って感じじゃないですがネェ」
「大人の事情ってやつでしょ」

そういうとユノはレオンに背を向けて拭き終わった食器を食器棚にしまい始めた。
レオンが何か言おうとして口をつぐんだ姿はユノからは見えない。
食器をしまってしまうともうやることがなくなってしまった。
ユノは手持ち無沙汰にかんがえ、ふと思いついてレオンを振り返った。
レオンはいつも通りの笑顔でどうしたんデスカ？と問いかけてくる。

「今日って何日だっけ」
「確かウーノの２４日デス。けもの祭りまであと7日デスネ」

けもの祭りというのはトレー月の初めに行われる祭りで、けものが大干ばつだったこの国に雨を降らし、作物が大豊作になったという伝説に基づいている。早い話が、収穫祭だ。
このとき国中が3日3晩盛り上がる。祭りらしい祭りのないこの国の唯一国が上げて祝う行事だ。

「え？もうそんな時期？じゃあディアンの誕生日もあと7日じゃない」
「ディアンさんって誕生日あったんデスカ？」

レオンが首を傾げる。ユノは財布の中身を確認しながら答える。ぎりぎり予算には足りそうだ。

「うん。いくら聞いても答えてくれないから私が勝手につけたの。私が館にボール放りこんでディアンに『消えろ』って言われた日よ」

「素直に初めて会った日だっていいマショウヨ・・・」

レオンが呆れたように言う。そして自分の財布を手に取った。

「俺もディアンさんにはお世話になってますカラネ。一緒に贈り物を選びマショウ」

ユノは嬉しそうにうん、と勢いよく答えた。

「あれ？ノクス兄さんもう飽きたのかな」

メリクリス家の前を通ると双子のはしゃいでいる声がよく聞こえた。双子を追いかけまわしているであろうノクスの声も。

「ねえ、ちょうどいいから会っていく？」

「ンー・・・やめておきマス。嫌な予感がするンデ」

てっきり肯定的な返事がくるとおもっていたユノは目をぱちくりとさせた。レオンはそんなユノのことを気にせずさわやかな笑顔でさあ行きマショウとユノを急かした。

昨日のことをディアンから簡潔ながら聞いていたレオンはシスコンの鋭い目を向けられてはかなわないと足取りはいささか早くメリク

リス家の前を通りすぎたのだった。

通りはもう祭りの準備にはいっているところがあるのか、とんかんとあちこちから金槌の音が聞こえてきた。

ユノはいろんな店をめぐったが、これというものはなく、少々落ち込んでしまった。
レオンに聞いてみるともうすでに買ったらしい。
見せて、とねだるとダーメとユノが届かない位置まで包みを持ち上げられてしまう。
意地悪、と頬を膨らませたユノをみるレオンは心底楽しそうで、ユノは完全にへそを曲げてしまった。

もういいとわざとレオンを振り払うと自分は複雑な路地裏を闇雲に進んでいく。
わき目も振らずにずんずんと気が向くままこっちを曲がりあっちを曲がり。

気づいたらユノは見たことのない場所まで来てしまっていたのだった。

まつりもの（後書き）

※補足　月

ウーノ　四月　トレー　五月　トレス　六月　セウロ　七月　ミリス　八月　メリ　九月　ビス　十月　チョネ　十一月　ヴェイネ

十二月　レーレ　一月　ユウセ　二月

まいごもの

ユノが住んでいる街は首都から程よく近く、けれどさほど都会ではない割にそれなりに大きく、そこそこ人通りもある。
しかし大きな街ゆえに長年住んでいるユノにも把握できていない場所は多い。
例えば裏通りとか。

「・・・・・・ここってどこ・・・」

斜陽の刺す狭い道でユノは途方に暮れて呟いた。
人はいるにはいるが、みな俯いて早足でユノの横を通り過ぎてしまう。話しかけようとしても軽くかわされてしまうのだから自分で道を探すしかない。

しかし進めば進むほど道は複雑になっていき、最後には袋小路にたどり着いてしまった。
日が落ちようとしている。
レオンは焦って自分を探しているだろう。それとも怒って帰ってしまったか。
それにそろそろ家に帰らなくては家族が心配する。兄も心配性だから遅くなると怒られるだろう。大好きな兄に怒られるのはできれば避けたかった。

息をついて引き返し、最初の曲がり角を曲がろうとした瞬間目の前にぬっと黒い壁が現れた。
どうにかぶつかる直前でユノは身を翻し、鼻に打撃を与えられずにはすんだ。
既視感を感じて見上げると深いフードを被り、口元も黒い布で隠された人間がユノをフードの奥から見ていた。
その背の高さから男性だということが分かる。体系的にはディアンとどっこいどっこいだ。
フードの男は首を傾げ、布に阻まれてくぐもった低い声で呟いた。

「子どもがなんでこんなところに・・・？ああ、迷子か」
「迷子じゃないですーちょっと走ってたら道がわからなくなったんですー」
「それを迷子と言わずになんと言うんだ」

迷子という言葉に反応してユノは唇を尖らせた。自分でも迷子だとわかっていたが、気づきたくなかったのだ。１４歳にもなって迷子だなんて！
さらにユノは何か言おうと口を開いたが、はっとした。
フードを被ったどう見ても怪しい男と話している場合じゃない。早く見知った場所にでてレオンに謝らなければ。
フードの横を通って行こうとすると呼び止められて腕を掴まれる。
さては人攫いだったか。ユノは一気に顔を青くさせた。

「なんだその顔。傷つくじゃないか」

フードはため息をつくと腰を屈めてユノと視線を合わせた。そしてぱっとユノの腕を離すと両手をあげて自分がユノに何か害する気はないことを表明した。そのうえで真剣にユノに話しかける。

「いいか？ここは夜になると極端に治安が悪くなる。たまたま居合わせたのが俺だったからいいが、次に会うのが人攫いじゃないとも限らんぞ。変態もよくでるしな」
「う・・・仕方ないじゃない、道がわからないんだもの」
ユノはフードが何もしてこないことに安堵してその話の内容に不安げに服を握った。
フードはにやりと笑い、悪戯気に提案する。
「そこでだ、俺が道を教えてやる。俺がいれば変なやつも寄ってこないだろう。どうだ？」
「本当？」
「本当だ」
フードに頷かれてもユノは疑わしそうな目をする。優しくされてもフードには何のメリットもない。
美味しい話には裏がある。安い野菜だってワケがあって安いのだ。
たとえは少々おかしいかもしれないが。
フードはそのかわり、と前置きをした。それきた、とユノは身を固くさせる。
「ちょっとお使いを頼みたい・・・いや、簡単なものなんだが」
「何？」
「女物のアクセサリーを買ってきて欲しいんだ。知り合いにあげなくちゃいけないんだが、俺には何かなんだか分からなくてな・・・。それに装飾店は俺には居心地が悪い」
「そんなのでいいの？」
ユノは呆気にとられた。簡単ではあるが確かにフードでは難しいだろう。

その背の高さでは店の天井に頭をぶつけてしまいそうだ。
頼むよ、と軽く拝んで見せるフードにユノは了解の返事を返した。

ひょいひょいと進むフードの端をユノはしっかりと握りながら道を進んでいた。
フードはユノの歩幅を考えてゆっくりとは進んでくれているようだが、それでもユノには十分早く、いささか駆け足で歩かなければいけなかった。

「そういえばそのアクセサリーをあげる女の人ってどんな人なの？それがわからなかったらアクセサリーを選ぼうにも分からないわよ」
「そうだなぁ・・・好きな色は赤っぽいやつな。そしてじゃらじゃらした奴が嫌いらしい。シンプルなやつを頼む」

歩きながら話すフードの声は弾んでいて、その女の人のことを好ましく思っていることが伝わった。
ユノはふむふむと頷き、じゃあ、とさらに突っ込んだ質問をした。

「そのアクセサリーとおそろいのものは必要？」

ぶっっと何かを吹きだした音がして、フードが急停止した。急に止まったフードの背中にユノは顔面から突っ込み強かに鼻を打った。
いったいと涙目になるユノにフードは振り返って噛みついた。

「おま・・・！なんてこというんだ・・・！」
「だってアクセサリーはおそろいのものを持った方がそれぞれの身を守るお守りになるって・・・」

本に書いてあった。

ユノがそう言おうとすると軽く頭をはたかれる。痛さが倍になった。

「馬鹿。首都ではおそろいのアクセサリー付けてると恋人もしくはそれ以上としてみなされるってことは・・・ああ、子どもだから知らないか」

「子どもって！これでも１４歳なんですからね！」

「充分子どもだ。ああくそ・・・」

フードは顔を手で覆うとさっさと行って来いと近くの装飾店を指差す。

気づけばユノの見知った場所に出ていて、指差された装飾店も何度が通ったことがある。美しいものばかりと有名な場所だ。

ユノは素直にフードの財布を受け取り、店の中に入って行った。

選んだアクセサリーは赤い宝石のついただけの銀細工のネックレスだ。

金貨が２０枚ほどフードの財布から消えて行ったが、それなりの品だから問題はないだろう。

アクセサリーを受け取って店を出るとフードが店の横の小さな路地でこっちだと手招きをしていた。

ユノが近づいてアクセサリーと財布を返す。

フードが袋の中のアクセサリーを確かめるのをどきどきしながら眺める。

「どう？金貨２０枚以上しちゃったんだけど」

「ん。これならあいつも満足すると思うぞ。センスあるなぁ。金なら無駄にあるから心配すんな」

そういってユノの頭をぽん、と軽く撫でる。褒められたとユノはくすぐったい気持ちになった。

「ここら辺で大丈夫か？」

「うん。あとは道に沿って行くだけだから」

心配しているように言うフードにユノは大きく頷いて見せた。それからここまで送ってくれてありがとうございます、と丁寧に頭を下げた。

フードはお互いさまだと苦笑した。

そうなのか、とユノが軽く首をかしげているとユノサン！と聞きなれた声がしてユノは思わず後ろを振り返った。

「よかったな。迎えが来たみたいだぞ、ユノサン」

「ユノです」

「そうか」

最後にフードは軽くフードをあげてユノと視線を合わせて笑った。

「じゃあ、また会うときにな、ユノ」

そういうとフードは路地の闇の中に消えていった。

「ユノサン！ああもう心配したんですカラネ！一人で勝手にどこかへ行かないでくだサイ！何かあったらどうするんデスカ！」

「うん・・・」

ぷりぷりと怒るレオンにユノは生返事を返す。
さっき見たものの衝撃がまだおさまらない。

「・・・？ユノサン？聞いてマスカ？あ、大丈夫デシタカ？何か変なことがあったりトカ・・・」
「ここまで送ってくれた人がいたから大丈夫」
「そうデスカ・・・その人はドコニ？お礼を言わなくテハ・・・」
「もう行っちゃった。ちゃんとお礼を言ったから大丈夫よ、それより早く帰らないとノクス兄さんに怒られちゃう」
「そうデスネ。ディアンさんもお腹を空かせているでしょうし」

ああ、そうだ、贈り物は買えましたか？と問うレオンにユノは黙って頭を振った。
そうデスカ、とレオンはユノの手をつかむ。
もう離れちゃいけませんカラネ、と微笑むレオンにユノもぎこちなく笑みをかえす。

フードの男は漆黒の目を持っていた。

兄に聞いたら何か知っているだろうか、とユノは考えつつもなぜか秘密でいたくてこっそりと胸の奥にしまった。

はたらきもの

迷子になった次の日、またユノは街へと繰り出した。祭りまで一週間を切ったということであたりは準備でにぎわっている。

今度は裏通りには近づくことはせずに表の店だけ見て回ったが、特にディアンの誕生日の贈り物として通用しそうなものは見つからなかった。

そもそも一日中館に引きこもり、外にも出ないから服もいらない、装飾品にも興味のないディアンのような男にふさわしい贈り物はなんなんだろう。

ユノはうーんと唸ってから来た道を戻り始めた。わからないのなら本人をよく観察して欲しがっているものを察するべきだ。

とことこと通りを進んでいくとこのまえ勝手に進んだ裏通りへの入り口が見えた。

気になってちょっとだけ覗いてみる。裏通りはしんとしていて人通りが少ない。我ながらよくこんなところを闇雲にすすめたものだ。

ユノはしばらく裏通りを眺めていたが、首を振ってまた通りを進み始める。

フードにまた会えるかもしれないという淡い期待はあった。けれど会えないだろうという妙な確信もあった。

「会えたなら聞いてみたいことがあったんだけど・・・いつか会えたときでいいよね」

ユノは呟くとディアンを観察しに館へと戻って行った。

館へ戻ると何やら騒がしい。
レオンがディアンと議論している時のような騒々しさではなく、ユノは首を傾げて扉を開けた・・・とたんにげんなりとした。

「ノクス兄さん・・・なにやってるの・・・」
「おおーユノか！ちょっと聞いてくれよーこのおにーさんが宝の部屋へ案内してくれないんだよー」
「何故お前を俺の部屋にあげなくちゃいけないんだ？」

ノクスが本を返して新しい本を借りようと館に押し掛けたらしい。無邪気にユノに助けを求めるノクスにいらいらと言葉を返すディアン。一方的に敵意が向けられているが、向けられている相手はへらへらとそれらを笑顔でかわしている。かわされたディアンはその態度にまたイライラを募らせ・・・どう見ても悪循環だ。できれば近寄りたくない。
そんな妹の心境を知ってか知らなくてかノクスは口をとがらせてディアンに向き直る。

「もー冷たいこと言っちゃってさー、やっぱ自分の目で選んだほうが効率いいじゃん？まあぶっちゃけ他にどんなお宝本を隠しもってるか知りたいわけなんだけど」

そこでノクスは言葉を切ってすうと目を細くする。

「何？俺をそんなに入れたくないってことは俺に見せられないやばい本とか置いてあんの？」
「やばい本とは何だ？」
「そりゃあやっぱりぃ？国がさすがにやばいって発禁食らわしたあっはんなやつとか？うっふんなやつとか？やだ俺も見てみたいそれ。一人占めはずるい！」

悶える兄に妹は冷めた目を返し、同じように呆れた目をしたディアンにレオンはどこ？と聞いた。

「レオンなら奥の部屋でいろいろ本を漁ってたぞ」
「んーじゃあそっちいこうかな」
「レオン？なにこの館犬いるの？家でもいってたけど」

ありがとう、と返事を返したユノに復活したノクスが聞いてくる。そういえばノクスはまだレオンに会ったことはない。いずれ会うなら今紹介したほうがいいか、ああでも本人は会いたくない的なことを言ってたような、とユノが悩んでいるときにディアンがノクスに頷いた。

「便利な犬だ」
「ええーいいなー俺動物すっごい好きなんだよね。軍犬とかさ、超かっこいいから餌付けさせて手なづけてたんだけど軍長にバレてめっちゃ怒られてさー。犬に癒し求めてもいいじゃんって思うんだけど軍長頭固くってさー」
「あの・・・ディアン・・・その言い方は誤解を与えると思うんだけど」

ディアンにだけ突っ込むユノ。ノクスの言葉には深く突っ込んではいけない気がしたのだ。一文官でしかないノクスが国のそこそこの戦力を誇る軍犬を勝手に手なづけてしまうなどまさか。冗談だろう。え、犬じゃないのか？と首を傾げるノクスにユノはううん、と首を振った。

「結構前にそこらへんでボロボロになって倒れてたのを家で看病したの。今はディアンのとこに居候してるけど。あ、そうそう、ノク

ス兄さんと同い年よ」
「っまじで！？」

ノクスが嬉しそうな顔をする。身の回りに同い年はあまりいなくてつまらないと前に零していたことを知っているユノは兄に喜ばせることができて少し照れくさくなった。
おおじゃあ会いにいこう、とユノを連れて部屋の中へ入ろうとするノクスをむんずとディアンが掴む。

「いいじゃないか、少しぐらい入ったって。減るもんはないだろ？」
「お前を中に入れたら本が数冊無くなってそうでな・・・」
「・・・ベツニヒトサマノモノトッタリシナイヨ？」

明らかに目を泳がせながらの言葉にディアンは眉を吊り上げいつかのようにぽいとノクスを館の外に頽り投げた。
いってえ！と喚く声は聞かなかったふりでさっさとディアンは部屋へと戻ってしまう。
ユノはしょうがない、と肩を竦めてディアンの後に続いた。

「あーくそ、ガードかったいなぁ」
外に放り出されたノクスは痛む尻を抱えながら自室へと戻っていた。
ベッドにうつ伏せになって日の柔らかな香りを吸い込む。
警戒心の強い館の住人はまだノクスを認めるつもりはないらしい。

下手にちょっかいを出したら今よりも悪化しそうで彼と接している間、実はひやひやものだ。

そこまで食い下がっても彼の情報量には目を見張るものがある。先日見せてもらったものなどどのくらいの価値があるのだろうか。専門家に見せたら垂涎ものだろう。ざっと読んだノクスでさえ貴重なものだと理解したぐらいなのだから。

何にせよ、けものを探すという使命にはあの館の資料が大いに役に立つ。それを読むためにはあの警戒心の高い獣を懐柔しなければならない。妹にはそこそこ懐いているようだが、可愛い妹を利用する真似はしたくないし、しないつもりだ。

「ユノに手を出したら殴るけどなー」

ぼそりと独り言をつぶやくとノクスはよいせと身を起こす。
痛みが幾分か緩和された尻を撫で、椅子に座って机に向かう。
机に置いてあるのはインクとペンと嫌にぼろぼろな紙だ。あちこちシミがついていて普通なら再利用されてもおかしくない状態のそれは風に舞い上がられないように本で抑えられていた。

ノクスは本をどかすとペンにインクをつけて紙に何やら書き込む。
書き込んだ文字はインクが乾いていくと同時にすうと紙に溶け込んで消えた。
しばらく時間がたつと今度は何もしていないのに文字が勝手に現れ、端からゆっくりと溶けていく。
溶けていく文字を目で追ってノクスはため息をついた。ペンを手に取るとカリカリと走らせ、文字が現れるのを待つことなくまたもとのように本を置く。
そして両腕を頭の後ろに組んで背もたれに体重を掛ける。その姿は

まるで勉強に飽きた学生そのものだ。

「あー早く休暇もらえねーかなー」

ノクスの一人ごちる声は部屋に響いてやがて消えた。

みつめるもの

ユノはじいっとディアンを見つめる。その姿は猫じゃらしにじゃれつく前の猫と似ていて真剣だ。彼女に尻尾があったらピンと立てて高くしていることだろう。
猫じゃらしの方はといえば居心地が悪そうに身じろぎはするが手の中の本に夢中のようだ。

ここ数日、そんな光景が館のあちこちで見られている。
ディアンが別の場所にいこうとするとまるで擦り込みされた小鳥のようにユノがあちこちついて回るのだ。

ほほえましいじゃないか。レオンは笑い出しそうになるのを抑える。おおよそのところ、ディアンへの贈り物をまだ考え付かないユノが焦ってきているのだろう。普段の彼女にはないほどディアンに積極的だ。
しかしディアンはといえばどこか浮かない顔。なぜこんなにもユノが自分に興味を持っているか分からない・・・といった様子でユノの気配を探っていることがよくわかる。
それぞれの事情をわかっているからこそレオンは口元をふにゃりと緩ませた。
傍観者とはいかに楽しいものなのだろう。けれどいつまでも見続けることは不可能だ。
レオンは二人にご飯ができマシタヨ、と呼びかける。

「あ、はあい・・・ほらディアンもちゃんと食べなさいよ」
「この考察が終わるまで・・・先に食っててていい」
「ディアン！」

「ユノサン、ディアンさんはちゃんと食べると言っているのデスシ、先に食べてしまいまショウ。前みたいに食べないということはないのですカラ」
「う・・・」
「ほら、さっさといけ。お前がいると気が散る」

いきり立つユノをレオンがなだめる。ディアンもそう言っているのだから・・・とユノはしぶしぶ席について食べ物に祈りをささげて食べ始める。

今日のメニューはレオンお手製のスープに焼かれた魚、そしてミリスの店のパンだ。
あっさりとした味なのに出汁はちゃんとでている。どうやら今日のスープは海鮮物から出汁を取ったらしい。微かに混じる塩が良いアクセントになっている。

そのスープを行儀よくスプーンですくって口元に運ぶユノだが、目はディアンに固定されたままだ。
いつまでたってもディアンから目を離そうとしないユノにレオンは顔を険しくした。

「ユノサン！お行儀が悪いデスヨ？それにディアンさんもそんなに見られたら落ち着かないデショウ？」
「はあい」

めっと幼子にするように叱るレオンに首をちぢこませて了承するユノ。ディアンも心なしか視線が外れてほっとしたようだ。強張らせていた肩をほぐし、首に手をまわしている。
でもね、とユノが言い訳をするように口をとがらせる。

「しょうがないでしょう、祭りまであと3日・・・さすがの私でも焦るわよ。家に帰ったらノクス兄さんがうるさいから考えに没頭できないし・・・」
「だからといって贈り物をするディアンさんに負担を掛けてどうするんデスカ。あのひと、このあいだからユノはどうしたんだと聞いてくるのデスヨ？」
「そんなこと聞いてくるの、ディアン」
「あとはユノさんの兄だと主張するうるさい男が来たら知らせるヨウニト。・・・俺のいない間にノクスさんとディアンさんの間に何か確執があったのデスカ？」
「・・・兄さんったら・・・」

はあ、とため息をつくユノを心配そうにみるレオン。あまりの兄の嫌われっぷりに馬鹿馬鹿しさを感じたユノは説明もせず、ちょっとね、と言葉を濁した。それより、とユノは小声でレオンに問う。

「どうしよう・・・ディアンの贈り物。考えても考え付かないのよ」
「俺に言われてもあれですケド・・・そうデスネ、本ハ？」
「腐るほどあるのにさらに増やしてどうするのよ。それに本って高いのよ。金貨が取られちゃうんだから」
「エー・・・じゃあアクセサリー、トカハ・・・？」
「あの男が興味ありそうに見える？」
「見えまセンネ、ハイ」

はあと二人揃ってため息をつく。器はもう空になってはいるが、お代わりをするほどお腹もすいていない。
レオンがうーんと唸る。

「俺の場合ぱぱっと決めちゃったけれど難しいデスネェ・・・いっそのことディアンさんが一緒に店見て決めてくれればいいんデスケ

ド」
「外出てくれたら苦労しないわ・・・夜だったら出ることは出るけど夜にやってる店なんて酒場とかそのへんよ。なんの解決にもなってない・・・ん？」
ふと何かに思い当ったようにユノがぴたりと動きを止める。そのままゆっくりとディアンをみてふうん、とにやりと笑った。
「決めた！」
「ウワ、びっくりシタ・・・良い案が出ましタカ？」
「ええ！これならぴったり！レオンのおかげよ！」
いきなり勢いよく立ちあがったユノにレオンはそれは良カッタ、と返した。
そのまますたすたと出口へ出るユノを見送る。
「これから作業に入らなきゃ・・・時間足りるかしら？あ、ごめん、レオン、私祭りの日までここには来ないわ！」
「それはいいですケド・・・何を思いついたんデス？教えてくだサイヨ」
首を傾げるレオンにユノは心底楽しそうに口元に指を立てた。
「秘密！じゃあね、レオン！」
「ハハ・・・そうですヨネ、ハイ、また3日後ニ・・・」
玄関ホールで手を振ったレオンはふと後ろに立った気配にびくりとした。
いつの間にやら、レオンに覆いかぶさるようにディアンが立っていたのだ。気配を感じなかったと心臓をばくばくさせるレオンなど気

にもしていない様子でディアンはユノが出て言った扉を一瞥してはあ、と息をつく。

「・・・今日は早めに帰ったな」

「エエ、なんでもやることがあるソウデ。それとあと3日間は来れないようデスヨ」

ユノと話していたことを聞かれたかとレオンは内心ひやひやしながら答えた。

ディアンはふうん、と興味なさそうに頷くとさっさと部屋の中へ戻ってしまう。何をしに来たんだろう、とレオンは首を傾げた。

その矢先にディアンが振り向いてレオンはどきりとした。

玄関ホールにも窓はある。そこから差し込んだ午後の明るい光が照らしだした館内は程よく明るい。

反射する光にほの暗く照らされたディアンはまるで手負いの肉食動物のようで。あたりを警戒する鋭い目の色は漆黒。

（ん・・・？いや・・・？）

レオンは目を閉じて頭を振った。鋭い視線に射抜かれた体はまだちょっと震えている。

ディアンがたまに見せるこの目はユノがいるときに見られることはない。

たぶん無意識なのだろう、震えるレオンを困ったように見たディアンはレオンに近寄ってくる。慌ててレオンは何でもないようなふりをしてなにか話題を提供しようと頭を回転させた。

「ア・・・ああそういえば今日はノクスさん来ないですネェ」

「・・・・・・・・・」

ぴたりとディアンの足取りがとまり、眉間にこれでもかとしわを寄

せる。もともとの鋭い顔つきもあってか、ものすごい形相になる。
子どもがこれをみたら一目散に泣いて逃げるだろう。
そんなにノクスが嫌いか。

「ディアンサン・・・顔がすごいことになってマス・・・」
「・・・ほっとけ。あいつがきたら真っ先に俺に言え。お前に任せたら簡単に部屋に入れられそうだ」
「ハア・・・」

ぶつぶつと口の中で何か言いながらまた部屋へと戻りだすディアン。
もうさっきの肉食獣のような目はしていない。レオンはほっとした。

「ああ、そうだ」
「へ？」
「あいつは赤い目の人間を探していると言っていた。知ってるか」
「・・・・・・イエ？そんな人間いるんデスカ？」

問われた言葉にすこし間をおいてレオンは応えた。口元にはふにゃりといつもの笑みが浮かんでいる。
そうか、とディアンは応えてそのまま何も言わない。納得したようだ。

「赤い目の人間、ねえ」

レオンは呟くと台所に向かう。
その口元はさっきのようなふにゃりとした笑顔ではなく、への字に歪められていた。

おかしもの

祭りが始まる夕方近くになってユノは館の門をくぐった。
ディアンにあげる贈り物はこの日のために取っておいた綺麗な袋にいれてある。

「喜んでくれるかな・・・」

ちらり、と袋をみやるユノ。不安になるが、3日かけた自信作だ。
無理やりにでも渡すつもりだった。
夜には家に帰らなければならないが、祭りということもあっていつもよりは遅くとも叱られることはない。
今頃家では豪華な食事の準備でメアリが大忙しだろう。今日は館で食べると言ってあるのでユノの分は無いだろうが、明日がある。
ディアンの誕生日は今日しかないのだ。

「レオン―？ディアンー？」
「ア、ユノサン？来たんデスカ？」

3日ぶりになる扉を開けると台所のほうからレオンの声が聞こえた。
今日食べる料理を作っているのだろうと納得してユノは台所のほうに足を向けた。

「レオン久しぶりー　何作ってるの？」
「ユノさん3日ぶりデス。今日のご飯作ってるんデスヨー」

本を片手に鍋をかきまぜるレオンの姿は大変にあっていてユノはくすりと笑った。

レオンは竈の火を小さくすると改めてユノに向き直った。
「贈り物は持ッテ・・・ってそれデスカ、ユノさんの贈り物ハ」
「そうそう、2日徹夜しちゃった」
ユノは手に持った袋を持っててへとごまかすように笑う。レオンもつられたようにへらりとして徹夜はいけまセンガ、まあしょうがないデスネ、とユノの頭を軽くなでた。
ユノは照れくさく感じてレオンの手をどけると鍋の中を覗き込む。
「これなあに?見たこと無いけど・・・」
「ディアンさんが見つけた本の中に昔けものが好んで食べたモノ、みたいなレシピがあったのでそれを再現してみたんデス。ちょうどけもの祭りですシネ」
「ふーん」
「昔はそんなに肉を食べなかったみたいデスネ、魚料理が中心デ。このことからけものは海岸沿いに住んでいたのではないかと朝からディアンさんと議論してバカリデ・・・」
「ああ、はいはい」
拳を握っての熱烈な話をユノは軽くいなしてテーブルの上に置いてあった菓子に目を止めた。
「レオンーこれは?」
「とディアンさんが言うのデスガ、俺の言い分ではけものは森の中に暮らしていたことが多いと思ったのデスヨ。なにしろもともとは人間を避けて暮らしていたわけですカラ。なので木の実なども食したのではないかと思ったのデスガ、ディアンさんに森の中では肉を食べなければ栄養は取レナイといわれマシテ・・・」
「あーはいはい」

レオンは取り込み中の様だ。
まだ続くレオンの話を聞かずにユノは勝手にその菓子を口の中に入れた。
さくりとした歯触りにふわりと香るナッツの香り。ほのかな甘みが口の中に広がってすぐに唾液に溶けて消えていく。
おいしい。
ユノはもう一つ、とその名もない菓子に手を伸ばした。

「おいしい、これ。レオンが作ったの？」
「・・・ユノサン、話聞いてマシタカ？」
「ううん、全然」
「・・・・・・」
「それよりこれー」

うなだれるレオンの口元にユノは菓子を近づけた。無意識なのか、そのままレオンはユノの手から菓子を口に含み、ああこれデスカ、と頭を振った。

「これは俺がつくったんじゃないデスヨ。ディアンさんデス」
「・・・ええー！！？ディアンが！！？というより料理できたの！？」
「いやそこまで驚かなくトモ・・・下手すると俺よりも手先は器用デスヨ、ディアンサン。何しろ壊れた本の修正を軽く行うほどなのですカラ」

といわれても。あの大きな図体でこんな繊細な菓子を作れるとはいささか信じ難かった。
ユノは手に菓子を持って本の中に埋もれたディアンの背中へ飛び込んだ。

赤い本を開いていたディアンは後ろからの衝撃に前につんのめりはしなかったものの首を曲げて迷惑そうにユノを見やった。

「ディアン！ねえこれつくったって本当！！？」
「・・・うるさい重い降りろ」
「重いって！それは失礼なんじゃない？」
「なら言いかえる。お前の体重が俺にかかっていて負担になっている降りろ」

ディアンに言われしぶしぶ背中から降りたユノは改めてディアンの前に菓子を突きつけた。
ディアンはそれをみてまた視線を本に戻してそうだが、と答えた。

「・・・本当に？」
「俺が菓子を作って何が悪い」
「だって・・・」

今まで知らなかったし、とぶつぶつというユノ。ディアンは不思議そうな顔をする。

「いままで作ってなかったんだから当たり前だろう」
「そうだけど・・・」

ぷうと頬を膨らますユノにどう接しればわからないといった風情のディアン。レオンはその様子をこっそりにやにやと見つめている。ユノはなんだか悔しいのだ。今までずっとディアンの傍にいたのに自分が知らないことがまだあったことが。けれどそれはディアンに当たることではない。だから自分の中で消化しようとしているのだが、ディアンにしてみればその様子がふてくされているようにしか見えない。何が気に食わないのかわからないのだ。

傍目にはどっしりと少女の前で落ち着いているように見えるディアン。けれど内面はひどく焦っているのが目に見える。レオンはほほえましくその様子を見守っている。ディアンに助け舟を出そうという考えは全くない。
ディアンの右手が本から離れ、レオンは心の中で歓声を上げる。さあ、その手をどうする？ぷくりと膨らんだ頬に当てるのかさては抱きしめるのか。

右手が上がり、ふと下ろされた。その先には握りこまれたユノのディアンより小さな手。
手を繋ぐのか、その発想はなかったとレオンが考えていたその時ユノの手に当てられたディアンの右手がまた上昇を始め、ユノの小さな口元を覆った。

「むぐ・・・」
「いいから食え。言えばいつでもつくってやるから」

どうやらユノの手に掴まれたままの菓子を取り、口の中に押し込んだだけらしい。レオンはなーんだとほっとした。
・・・ほっと？

口の中に菓子を入れられたユノはというと不服そうに頷いていた。機嫌は治ったようだ、とディアンは安堵し、また本に集中を戻しながら長椅子の方に移動していった。

その場に残されたのは部屋の入り口でうーんと何か悩んでいる風のレオンと口の中の菓子がなくなり、台所に置いていた袋を取りに行こうとしてレオンを見つけ首を傾げたユノだった。

しょくじもの

「大丈夫？なんか悩んでるんだったら相談に乗るよ？」
「・・・イイエ、何でもありませンヨ。ソ、それよりも誕生会の準備をシナイト・・・といってもあとはテーブルに並べるだけなのですガネ」

そういいながら慌てたように台所に引っ込むレオンにユノは不信感をつのらせた。
レオンは人がいい。何か悩んでいるようなら一人でため込まずに相談に乗らせてほしかったのだが、本人が拒否するのなら仕方ない。
ユノはレオンが何か言いたげなようだったら改めて相談に乗ることにして今は準備、とばかりに張り切ってレオンにあとに続いた。

テーブルに並べられた料理は魚中心のものが多く、またディアンに合わせたのだろう、肉料理は全くと言っていいほどなかった。
ユノ達が住む街は海からもまた山からも近いという食物に恵まれた地形にある。・・・近いとはいえ海からは馬車で2日、山へは3日かかるのだが、比較的近い方だとは言えるだろう。
海からは海路を通じて様々な場所から物が運ばれ、山を通って首都へ送られる。首都は山を一つ越えた先にあるのだ。
海から運ばれてきた魚は氷漬けにされ、店先に並ぶ。鮮度も申し分はないからレオンにとっては腕の振るいがいがあるというものだろう。

「ディアンー　できたよー」
「まて、今いく」

ユノの急いている声を聞いてディアンは開いていた本をパタリと閉じた。
いかにディアンといえど自分のために開かれたものに無視はできないということか。ただ単にけものの好物に惹かれただけのようにも思えるが。

いそいそと席に着くディアン。心なしか嬉しそうだ。
みんな席に着いてからそれぞれ祈りをささげ、食べ始める。

「あ、これおいしー」
「それはカッレの実というのがわからなかったんで別のものを変わりにしてみたんデス。カッレの実は香辛料のようだったので他の奴を入れてみたんデスガ・・・辛すぎまセンカ？」
「ううん。ピリってきておいしいよ、これ」
「それはよかったデス。ディアンさんハ・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「ものすごい勢いで食べてマスネ・・・」
「私こんなに食べるディアンはじめて見た・・・」
「・・・まあ初めて作った料理がディアンさんの口に合ったようでなによりデス」
「ていうか早く食べないとディアンに全部食べられちゃうよ・・・」

それからはみんなして無言で食器を鳴らす音だけが響き、しばらくするとテーブルに埋め尽くされた料理はことごとく空になっていた。
レオンはそれらの食器をいそいそと片付けをしつつフフフと楽しそうに笑みを浮かべた。ユノも井戸からくみ上げた水を持ってざあと泡を流す。

「食べましたネェ・・・あれほど喜んでくれるとは予想外デス」

「ねえ、ディアンまた部屋に戻っちゃったけどどうする？贈り物」
「とりあえずお茶を持って行ったときでいいんじゃないでショウカ」
「そうね・・・でも早めに渡したいの」
そわそわするユノにレオンはうーんと考えてから泡だらけだった手を流して食器を水につけた。
「なら今一緒に行きマショウ？食器はつけておけば汚れは落ちますカラ」
「うん！ちょっとまって、包み持ってくる！」
元気にばたばたと台所から去るユノの後ろ姿を見てレオンはまた微笑んでタオルで手の水分をぬぐう。
服が汚れないように、と付けていたエプロンを外しながら自分もこの前買ったディアンへの贈り物を手に取る。
「喜んでくれるデショウカ・・・」
それからまたばたばたとユノの足音がこっちに向かってくる。レオンはさっきと変らない笑顔のままぱっと顔をあげた。
「おやユノサン、見つかりマシタカ？」
「見つかった！見つかったけどさっき窓見たらノクス兄さんが・・・！」
「ハィ？」
慌てたように言うユノにレオンは首を傾ける。と同時にぎいと玄関ホームと台所を開ける扉が開いた。
「おー中はこうなってんのか・・・あ、ユノ！」

「あ！じゃないわよノクス兄さん！ディアンに嫌われてるっていうの知ってるでしょ？館に入ってきたって知ったらどんなに怒るか・・・」
「いやしょうがねえよ。けもの祭りん時は近所におすそ分けしなきゃいけないって母さん決めてんだからよ。それに館の前でけっこう声かけたぜ？」
「聞こえると思ってるの？」
「思ってた」
「兄さん・・・」
「はいっちゃったらしょうがねえよな？で？そっちがうわさのレオンってやつ？」

レオンは自分が固まったように感じた。目の前にいるのは短い栗色の髪を整え、青い目を持った男性。灰白色の軍服を着ている。
・・・軍服。

「俺、ノクスっつーの。王宮で文官やってる。まあ、宜しくな？」

・・・やばい。

「はあレオンといいます妹さんにはよくしてもらってますえーとすみません俺ちょっとディアンさんの方行かなきゃいけないんで席外していいデスカ？」
「いやそんな早口でいっても別になんもしねーって」
「・・・レオン？どうしたの？」
「すみませんユノさんちょっと先にディアンさんに贈り物してきますすぐ戻るんでそれまでお兄さんを家に戻した方が無難だと思うのデスガ」
「いやそれは私も思うけど・・・」
「心配しなくてもこれ渡したらすぐ戻るって！ところでレオン？そ

の髪長くね？前見えてんの？」
「はい問題ないですそれよりも早く帰った方ガ・・・」

「そこでなにをしている」

レオンの必死の説得もままならず、館の主が静かに現れた。

おこりもの

そのときまでディアンは楽しんでいた。

本に囲まれ、勝手に決められたとはいえ自分が生まれたことを祝ってもらい、あのけものが好んだという料理も食すことができた。しかもそれが自分の口に驚くほど合ったのもあって満腹からくる充足感に包まれていた。
いったい誰が不機嫌になろうというのだろうか。

しかしその幸せも台所がにわかに騒がしくなるまでのこと。

幸せな時間を邪魔者によって壊された不快感。
安全な場所にずかずかと押しいれられた気持ち悪さ。
様々な感情がディアンの中で入り混じり、それは怒りという形をとって表面に現れた。

「そこでなにをしている」

踏みしめた木の床がみしり、と音をたてたような気がした。

現れたディアンはどう見ても怒り心頭といった風情で

ユノはまずい、と体を硬直させた。

母のけもの祭りの時の習慣は知っていたし、近所におすそ分けを持っていくのは本来ユノの仕事だった。
ユノがいないとなると母がそれを頼むのは幼い兄妹を除いてはノクス以外にあり得ない。
さらに普段あれだけディアンに興味を抱いているノクスがそれを口実にしてこの館に殴りこんでくるのは容易に想像がついた。

けれども

（ノクス兄さんったらせめてディアンに贈り物を渡す時間ぐらい待ってほしかったわ）

さっさと渡さなかった自分を棚に上げてユノはぎゅっと袋を握って諦めたようにテーブルの上に置いた。

ディアンはどうやらご立腹だし、元凶の兄は冷や汗を浮かべながらけらけらと笑っている。
レオンに至ってはかちりと固まったままだ。

頼れるのは自分しかいない。

「やだおにーさん超怒ってるー☆　ほらほら笑って笑って？笑顔の方がかっこいいよ？」
「・・・・・・いいたいのはそれだけか」
「いやいやいや俺おすそわけ持ってきただけだって！誓って何かしに来たわけじゃないし！」
「・・・本当だと言い切れるんだろうな？」

「そりゃあ噂のレオン君見たかったし？　あと愛しの妹が野郎ばっかの場所にいるのもあれだから連れ出そうかと」
「・・・・・・・・・」
「やだ黙んないで！怖いから！」
「・・・ふっ」

ざけるな、とディアンの口から感情が言葉となってノクスにぶつかるその前にユノががっしりと後ろからディアンに抱きついた。
いや身長差のある二人ではむしろしがみついたようにしか見えない。
しかしディアンはその衝撃に怒りが抜け、むしろいつもより密着する暖かさに内心慌てふためいたようだった。
がつ、と勢いよくノクスと額を打ちあい二人して床にうずくまる結果となった。

ユノはというとすぐにディアンから飛びのき、仁王立ちして二人を見下ろす。

「ディアンはぴりぴりしすぎよ！いくら台無しになったからってそこまで態度に表すのは大人らしくないわ！　そしてノクス兄さんは人のことをちゃらかしすぎ！連絡無しで来たなら来たでお邪魔しますの一言もないの？」

そして涙目の二人にさらに一喝。

「ちゃんと謝りなさい！」

「・・・悪い」
「・・・こっちもすまなかった」

ぼそぼそと謝罪の言葉が両者から流れ、ユノはよろしいと満足そうに鼻を鳴らすと今の今まで空気になりきっていたレオンに心配そうに駆け寄る。

「で、レオン？大丈夫？」
「エ、エエ。ちょっと驚いてたダケデ。ユノさんはすごいですネェ、お二人を止められるナンテ」
「さすがにディアンは怖かったけど、まあ仕方ないわね・・・　ちょっとノクス兄さん！それ置いたらさっさと家に帰りなさいよ？」
「はいはい・・・　にしてもおにーさん石頭。めっちゃいてぇ」
「自業自得でしょ？」
「おいユノ？お前いつから兄ちゃんに冷たくなったんだ？」
「知らない」

ぷい、とノクスから顔を背けるユノ。そんなユノにノクスはやれやれと首を振った。
ディアンはというと一言も言わずに立ちあがってひたすらじっとノクスを監視している。
幾分かそがれたものの、ノクスに対する怒りは収まっていないという意思表示だろう。

レオンは心配そうにノクスのこぶを見て適当な布を冷たい井戸水に浸し固く絞った。

「とりあえずこれで冷やして・・・ああ、ユノさんお願いシマス」
「いや、俺がそっち行くし。これもついでに渡すし」
「イエイエ。そこに置いてくれれば後でしまっておくのでお構いナク」

ノクスがまだ手に持ったままだった容器を掲げて見せるとレオンは勢いよく首を横に振った。
そしてじりじりと近づこうとするノクスと距離を取ってまた自分もじりじりと動く。
ノクスの顔が面白いおもちゃを見つけたと言わんばかりに輝く。

「やだなぁ、同い年だし仲良くやろうぜ？」
「イエ、身分が違いマスシ」
「そんなこと俺は気にしないし！」
「俺が気にするんデス！ってうわあ壁！」
「ふっ　隙あり！！　気になってたんだよなぁその髪！！」
「ややややめてくださいッテバ！ほんとうニ！！！」
「ちょ、ちょっとノクス兄さん止めてって！　レオン嫌がってるし！」
「・・・追い出してもいいか？」

外野のことなど気にせずにノクスが素早い身のこなしでレオンを壁に追い詰め、はらりとその長い前髪を払いのける。

「ほーら別に悪い顔してるわけじゃ・・・！？」

隠れていたレオンの顔が一瞬だけ光に浮かび、すぐに伏せられた。
そしてそのまま壁に体重を預けて体制を低くするとノクスに足払いを掛ける・・・がひょいとかわされ、足を引っ張られ無理矢理に床に押し倒された。

強かに頭を床にぶつけたレオンは痛みに呻いてすぐに起きあがろうとするが胸の中心に勢いよく膝を押し付けられて息を一瞬呑みこん

だ。

げほげほげほと咳き込むレオンの前髪をノクスが無表情に掴もうとした、が。

がくりと後ろから襟首を掴まれ引き倒される。
逆さまの世界に影をつくっているのはディアンだ。

「・・・追い出す、といったのが聞こえなかったのか？」

ノクスは黙って身を捻ってディアンから逃れようとするが下から抗う力より上から押し付ける力のほうが強い。
どうあがいてもディアンに押さえつけられると悟ったのか、ノクスは軍服のポケットの中からナイフを取り出した。

傍観していたユノが軽く息を詰め、ディアンは警戒してノクスから距離を取る。

「兄さん、いくら怒ったからって刃物なんて・・・！？」
「・・・傷つけたりはしねーって。　何勘違いしてんだユノ」

弱弱しく笑い、ノクスは倒れたままのレオンに向き直る。
レオンは血相を変えて両手を使いノクスから逃げだそうとするが、それはいとも簡単に片手で押えられる。

ナイフを持った手がレオンの顔の前で一閃される。じゃき、と音がして一瞬後にばさりと黒いものが床に落ちる。

「よお、　明るい世界はどうだ？レオンさんよぉ」

ノクスは無表情に自分を睨む憎々しげな赤い目を見つめて静かに言った。

てかがりもの

「なあ、レオン・・・いや、『従者』か？」

無表情に見下ろすノクスの目を憎々しげに睨むレオン。
初めて見たレオンの目にユノは一瞬顔を背けてはこわごわと視線を戻した。

目の色は赤。しかしそれよりも注目するべき点がレオンの目にはあったのだ。
白目がなく、まぶたの下にあるのは赤く染まった虹彩だけ。瞳孔は明るいためか、針の穴ほどの大きさに縮小してしまっている。

例えるのならば小動物の目が人間の大きさになり、それが赤くなっているとでもいおうか。
小動物ならば可愛く見られても人間の顔についているとそれは違和感や嫌悪の対象にしかならない。
なるほど、レオンが前髪を切られたがらなかったわけだ。ユノやまだ幼い双子には刺激が強すぎると考えていたのだろう。

ノクスは自分で切ったレオンの髪を床に落としながら軽く肩をすくめた。

「にしてもすげぇな・・・　白目がないなんて。文献でしか見たこと無かったけどそりゃ隠したくなるよなぁ」

『・・・何が目的だ』
「目的ってそりゃあ判ってんだろ？『従者』なんだから」
『従者』という言葉を聞いた途端にレオンの方がびくりと震える。
割り込めない空気に押し戻され、ユノとディアンはお互いにこわごわと会話を試みた。
レオンの隠された素顔に圧倒されはしたが、レオンはレオンなのだ、なんの関係もない。それよりも彼らの話の内容が気にかかった。
「ねえ、『従・・・じゅうちゃ？』ってなに？何語なの？ていうかレオンなんて言ってるの？」
「・・・わからない」
「はい？」
「少なくともこの館内にある本の中にはないな」
「どうゆうこと？」
「首都・・・もしくは王宮にだけ伝わっているけものの話があるのだろう。けものと王族は繋がっている。　王族にだけ語られる話があってもおかしくはない」
ぼそりとディアンが呟き、それをかき消すようにユノ達にはわからないレオンの言葉が響く。

『俺は・・・俺はただここで穏やかに暮らしたいだけだ！』
「ごめんなーでもこっちもやっと得た手かがりなんだよ。何百年かけてると思うんだよお前ら捕まえるのに」
『それこそ知ったことじゃない。勝手にそっちが探してるだけじゃないか！』
「ああそうだ。勝手に探してるんだ。だからこそ余計に近くまで来たチャンスは逃せられねえんだよ察しろ」

レオンはぎりと唇を噛むとぼそりと呟く。
それはとても小さな声でユノ達のところまでは聞こえてはこない。
けれどノクスには十分な声量だったようで無表情が崩れた。

「それで済むとでも？舐めてんじゃねえぞ。それこそ文字通り首輪付けて引きずってでも首都につれてくわ」

ハッとした表情をしたレオンにノクスは手早く手刀を振り下ろし、意識を刈り取った。
だらりと弛緩したレオンを抱え上げようとしたノクスの肩に手が置かれる。
ノクスはガッと険しい顔で振り向きざまに手をつかみ、それから困った顔をして妹の名を呟いた。

「・・・ノクス兄さん・・・」
「あーユノ。許せ、これも仕事なんだ」

兄の今まで見たことのない顔に怯える妹にノクスはどうにかしていつも通りを装った。
昔ならばここで泣いているであろう妹は気丈にも涙をこらえ、ノクスは成長した妹を寂しげに見つめた。

「嫌だよ、レオンどっかにつれて行かないでよ・・・。　話全然わかんないけどレオン嫌がってるじゃない」
「・・・まあ嫌がることを強制してるからな。嫌われても当然だ」
「そんなの良いわけないわよ！　なんだったら私もついていく！」
「だめだ」

きっぱりと自分の考えを否定され、一瞬ユノが戸惑う。ユノの視線を避けるようにノクスは目を閉じて首を横に振った。

「俺はあんなとこにお前をつれては行きたくない。なによりも兄として」

「そ・・・」

「聞き分けてくれよ、ユノ。　わかるだろ？大人の事情ってやつだ」

ノクスに諭されたユノはぐっと息詰まってうつむいた。

その様子を見ていたディアンがぼそりとノクスに話しかける。

「・・・前俺にどっかの殿下に似ているといっていたな？」

「なんだよ急に。　認めるのか？」

「王宮に行ってやる」

「はぁ？」

「な、なにいってるのディアン？館から出たくないんじゃないの？」

「・・・出たくはないが出れないというわけじゃない」

あっけにとられる兄妹にディアンはさらに言葉を畳みかける。

「レオンのことといい、『じゅうしゃ』などと俺の知らない単語といい、そこには俺の知らんけものについての知識がありそうだ」

「・・・王族に戻ると？」

「殿下になるつもりはない。が、どうせお前が勘違いしてつれて行くつもりだったんだろう？だったら研究のため自主的に行ったほうがマシだ」

「・・・ふーん」

ふんふんと頷くノクス。ディアンも行っちゃうの・・・？とさらに俯くユノをちらりと横目で見てディアンは言葉をつづけた。

「・・・だが一つ条件がある」
「何だ？おにーさんを引っ張り出すためならどんなものでも用意するぜ？」
「身の回りを世話してくれるヤツが欲しい。自慢じゃないが俺は一人だと勝手に飢え死にする上にそこらの他人じゃ満足しない」
淡々と告げるディアンの言葉にユノの瞳が輝いた。
「わ、私！私　ついてく！　だてに６年ディアンのお世話してないわ！」
「・・・くっそ　そうきたか」
心底悔しそうに言うノクスにディアンが涼しい顔で聞き返した。
「なんだ、不満か？俺を王宮とやらにつれて行きたいんだろ？」
「ああもう勝手にしろよ！　あとユノ！」
「え、な何？　ついていくからね！置いてったりしないでね！」
「しねーよ。じゃなくて」
頭に？マークを浮かべて首を傾げて見せるユノの髪をぐちゃぐちゃにしてノクスは哀しげな表情で言った。
「ごめんな、だめなにーちゃんで」
「？？」
「とりあえずこいつは逃げない様に俺が預かっとく。出発とやらはまぁ明日話すわ。じゃユノ、俺今日家帰らずに宿泊まるから」
「ああうん・・・」
ぱたん、と扉が閉められてユノは茫然自失気味に呟いた。

「・・・あ、洗い物終わってない・・・・」
「・・・俺も手伝ってやるから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3584o/

ひととけもの

2011年6月8日19時00分発行